

戦後ユース・サブカルチャーズをめぐって(3) : 暴走族とクリスタル族

著者	難波 功士
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	98
ページ	43-67
発行年	2005-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10236/14000

戦後ユース・サブカルチャーズをめぐって（3）： 暴走族とクリスタル族

難 波 功 士**

【0】「ヤング」の分化

60年代、「青年」から「若者」へ、さらには「ヤング」へ。いわゆる団塊の世代がティーンエイジをむかえ、成人に達するにつれて、若い人々を指示する言葉は変化していった。

こうした呼称の推移からは、社会を担う有為な大人への社会化を期待され、その中途にある者としての「青年」像から、より余暇や消費に傾斜し、時には逸乐的・享乐的ですらある「若者」像へ、さらには大人たちとはまったく別個の流行や市場を形成し、長くそこに留まり続ける「ヤング」像へ、といった変化が垣間見られよう。それは、「私生活至上主義」ともいうべき社会全体の価値観の変化を反映したのもでもあり、団塊の世代が主体もしくは客体となって確立された若者文化（Youth Culture）が、やがて社会全域へと拡散していく過程でもあった。そして、多くの差異を内包しつつも、一個のムーヴメントとして受けとめられていた若者文化（Youth Culture）から、多くのユース・サブカルチャーズ（以下YSと略記）が並立する状況への変遷でもあった（難波、2004）。

本稿では、70年代から80年代にかけての、こうした若者文化の変質の過程を、「暴走族」と「ク

リスタル族」という二つのYSを軸にたどって行く。そして、異なるクラスを背景とし、決して同一の社会空間に共存することのない、一見対極にあるかのようなYSではあるが、「遊び（消費）志向」「モラトリアム感覚」「当時の一般的性役割の基本的な受容」「顕在的もしくは潜在的な団塊世代への反発」といった諸点において、ある時代精神を共有するものでもあることを明らかにしていきたい。

【1】暴走族：モビリティとローカリティ

暴走族前史

暴走族の前史として、まず四輪に関しては、1966年の「原宿族」騒動が挙げられよう¹⁾。この「六本木族、みゆき族、新宿のダンモ族に続く原宿族」は、六本木族同様、裕福な家庭の子弟たちが中心であり²⁾、「表参道のいちょう並木の下は駐車自由。そこで、よその歓楽街の燈が消えると、若い自家用車族が原宿に集まってくる」（1966年12月1日号『週刊大衆』「深夜の狂態“原宿族”の知能程度」）。

一方二輪に関しては、カミナリ族などが、その前身といえる（表1）。しかし、59年に登場したカミナリ族は、「またの名をマッハ族——オートバイの消音器をつめたり、取りはずし高い爆音を

*キーワード：暴走族、クリスタル族、ユース・サブカルチャーズ

**関西学院大学社会学部助教授

- 1) その前年にはスポーツカーを駆る“マッハ族”が銀座に集まり、みゆき族以来の遊歩組と同様、ナンバに精を出していた（1965年3月22日号『週刊サンケイ』「ショック！銀座サーキット：“ナンバ”を狙うマッハ族とフーテン部隊」）。こうしたクルマ関連のYSのカテゴライズに関しては、エスノメソドロジーの立場からハーヴェイ・サックスによるHotrodderへの言及があり、カルチュラル・スタディーズの立場からは、Mods・Rockers・Greasersの分析や、ポール・ウィリスのBikerのエスノグラフィーなどがある（Willis, 1978）。
- 2) 1966年12月19日号『女性自身』「ドキュメント報告：原宿族狩り！」によれば、往きの電車賃だけでも出てくる女の子たちは、「家庭も平凡な中流階級の娘達が多いという。「男の子は、上流階級の息子が多い。車もほとんど自分名義よ。女の子は車なんかもってないわね」。

表1 モーターギャング諸族の比較 (兼頭, 1975a: 16)

	I カミナリ族	II サーキット族	III 暴走族
特色	技巧派	草レース派	無頼派
時期	昭和34年頃～昭和42年頃	昭和42年頃～昭和48年頃	昭和48年頃～現在
地域	東京中心	関西中心	関東中心
場所	特定広場 (公園、空地)	特定道路 (駅前、繁華街)	一般道路
時間	年中、夜間 (但し土曜日に限らず)	夏季、土曜の夜、夜中、緑日の夜	年中 (夏期最盛)、土曜の夜
構成員	オートバイマニアの高校生が主体	カーマニアの有職青少年が主体	高校生、有職者の未成年者が主体
リーダー	キャリアがありアクティブな高校生	特定リーダーなく、世話役程度の年長有職者	引率力、紛争処理能力、情報通、長いキャリア高い運転技術、凄いクルマを所有する年長の有職者
グループ名称	あり (ないものもある)	ない (あるものもある)	奇抜特異なネーミング
旗、ステッカー等	すくない	ない	ほとんどあり
供用車	二輪車 (中型以下)	四輪車主体	二輪 (大型)、四輪、混合
行動	曲芸運転、ドラッグレース (ゼロヨンテスト)、持久競走	観客 (一般市民) の前でのスピードレース、ハイテクニック披露	深夜集団で速度違反、信号無視、整備不良車運転、その対立抗争による犯罪に至る
取締り等	装置不良車運転として取締られたが社会は許容的	取締り警官に対し、観衆もまじって抵抗、騒動に至る	厳罰主義による徹底的規制、社会の非難の声大

とどろかせて突っ走るところからこの名がつけられた。都内だけで三万人、白いヘルメットをかぶり、皮ジャンパーに半長靴姿、主に深夜と明け方に出没。血気さかんな若者たちのこと…カミナリ族は乗っている車が自家用車ばかりなのを見てもわかるようにほとんどが中流以上の若者」であり、当時のマシンの性能の制約もあって「東京足立区の都電通りで五十三キロ (制限速度三十二キロ) でとばし、警ら中の白バイに制止されたが無視、約四百メートル逃走して捕まった店員林成雄 (20) がカミナリ族逮捕一号」といったように、後の暴走族の凶暴さとはほど遠い (赤塚, 1982: 536-7)。

しかし、高度経済成長やモータリゼーションの大衆化の中で³⁾、60年代後半に登場した「新宿カミナリ族」の場合は、「彼らのほとんどは十五歳から二十歳までの勤労青少年で、昼は職人、工具、店員、運転手などをして働いていた」(福田, 1980: 3) という⁴⁾。「初期の頃のサーキット族とかカミナリ族は経済的に相当のエリートで

あった。それに対して、現在の暴走族はいわゆる貧困層ではないが、いわば中間層が大部分である」(千葉, 1975a: 55) という事態へ、徐々に移行していたのである。だがその一方で、新宿カミナリ族の「代表的なファッションは長髪、革ジャン、ジーンズ。革ジャンには手を加え、ジーンズは、裾をほどいてわざとボロボロにはしていた。これがカッコよかったのだ。のちに登場する暴走族のファッションが、かなり「右」がかっていたのとは大きく違う」(1991年2月28日号『GORO』「平成不良宣言 好き勝手に生きた時代の不良たちは、いつも「族」といわれてきた！」) という段階にあった。

「暴走族」の構築

スタンレー・コーエンは、その著書“Fork Devils and Moral Panics”によって、60年代のイギリス社会において、イタリア製スクーターに乗り、細身のスーツをきめたシャレ者たち Mods (Modernists の略称) と、オートバイにまたがり、

3) 「カミナリ族 ヤマハから国産初の本格的ロード・スポーツバイク「YDSI」(2サイクル250cc)が発売されたのは、東京オリンピックの開催が決まり、道路が着々と整備され始めたところだった」(1987年5月号『Checkmate!』「ZOKU フーズク大研究」)。

4) 1968年には「新宿西口には、まだ高層ビルは建っていなかった。…新宿西口の中央公園には、四百人ほどのカミナリ族がたむろしていた。白バイをとり囲んで、プラグをはずしてしまうこともたびたびだった」(嵐山, 1985→2003: 374-5)。新宿を震源とした Youthquake に、これらバイカーたちも呼応していたのである。

革のジャンパーを着た典型的バイカー・スタイルの Rockers が、どのように社会的に構築されたのか、さらにはそれら両者の敵対関係が、どのような過程を経て社会問題として定着していったのかを明らかにした。当初はさほどその種別が判然としていなかったモッズとロッカーズであったが、タブロイド紙などの度重なる報道によって、徐々にそのスタイルを判然とさせていき、64年にはこの二つの際立った YS が、休日にロンドンから海辺のリゾート地に集結し、乱闘騒ぎを繰り返すというストーリーが、広く一般に共有され、その両者の差異と軋轢がドラマタイズされていったのである⁵⁾。

「63年でも、シンボルはまだ明瞭ではなかった。新聞は、相変わらず両方のグループを指して『ティボーイ』を使い、ロッカーズを指して『飛ばし屋 (ton-up kids)』といった用語を使っていた。またエドワーディアン (のティボーイ) の初期がそうであったように、『モダニスト』の語もファッション・ページにとどまっている以上のもではなかった。それぞれのグループに、フォーク・デヴィルとしてのアイデンティティが与えられるのには、公的なドラマが必要であった。…そうしたタイプへの否定的アイデンティティの割り振りは、モラル・パニックに拠っている」(Cohen, 1972: 190-1)

そして、メディアによって増幅され、定型化された逸脱のスタイルを学習した若者たちが、そのストーリーにのっとって実際に事件を起すと、すぐさま警察・司法・地域社会・教育機関などによる統制が始まり、事態は鎮静化していった。

こうしたプロセスを、日本の70年代、モーター・ギャングたちもたどることになる。まず72年に「18歳以下、サーキット・ゲリラ“週末暴走族”のスピードとセックス：富山、金沢、小名浜、岡

山と広がる暴走集団の“反乱”が意味するもの」(1972年7月21日号『週刊ポスト』)と報じられるような騒動が起こる。

「(昭和)45年以前は、まだ車は金持ちのドラ息子の遊び道具であった。それが、車の普及に伴って車は、庶民、とりわけ中央都市風俗にあこがれていた地方都市青年にも手がとどくシロモノになった。“サーキット族”の中味が変わっていった。／決定的な変化は、46年夏の福井市に起こったサーキット騒動だった。約三千人のヤジ馬の声援の中を、百台以上の車が、爆音と『キーッ』という音をたてて走り回った。この時の運転手はヤジ馬と同じ生活者大衆だった。金持ちのドラ息子が乗り回したのでなく、自らと同じ階層の連中であるから、歓声を挙げた。そして翌年夏の「富山を揺るがせた30日間」もそうだった」(1974年5月号『流動』「富山・金沢サーキット騒乱：北陸路を揺るがした四十日間」)。

この時、石川県警本部に検挙されたサーキット族121名の内訳は、「[年齢別] ①20代85人②10代29人③30代7人／[職種別] ①会社員29人②大工19人③運転手17人④工員14人⑤コック・バーテン等10人⑥学生6人⑦農林業4人⑧無職5人⑨その他17人」であったという。この中には二輪・四輪を乗り回した者だけではなく、いわゆる「傍騒族」も含まれており、こうしたギャラリーを巻き込んだかたちでの、特定の日時・場所で繰り返される暴走行為が、「西日本型」の特徴であった⁶⁾(表2)。

一方関東では、「サーキット族は、それぞれグループを結成し、徒党を組んでいるのが特徴だ。／東京でいえば、「影」をはじめ「スペクター」、「ジェロニモ」、「流星」、「ファントム」、「一寸法師」、「ピラニア」…などといったぐあいに、グループ名をつけ結束を図っている」(1972年7月

5) 初期の報道に用いられた合成写真——実際とは異なるイメージ形成——によって、Mods vs. Rockers, Moter-bikes vs. scooters という図式が作り上げられ、暴力と破壊への計画的な意図を持った、クラスレスな若者たちが、リゾート地に甚大な被害や損失をもたらしているというストーリーが構築されていった (Cohen, 1972)。

6) 67年の京都の宝ヶ池サーキット事件、69年の名古屋テレビ塔事件など、特定の場所で見物人を巻き込む「西日本型」の騒動は60年代から起こっており、そのピークが76年の神戸祭事件であった (堂城, 1982)。75年の調査でも、集団走行するグループ間同士の激しい縄張り争いを特徴とする関東型と、野次馬とともにサーキット行為を楽しむ関西型という対比が指摘されている (田村・麦島, 1975)。

表2 東西の暴走族の特徴・対比

(神戸市青少年問題協議会、1977：35)

特徴	東日本型	西日本型
グループ規模	大きい(連合化)	小さい
グループ結束	強い	弱い
年齢	若い	高いものもいる
高校生	多い	少ない
参加車両	二輪混合	四輪主体
暴走のタイプ	遠距離ツーリング	特定場所でのサーキット
抗争	多い	少ない
スプレーによる落書き	あり	なし
群衆	なし	あり
爆竹等	なし	あり
祭・夜市との関係	なし	あり
警察との関係	親警察的	反警察的

21日号『週刊ポスト』)。だが、「当時から抗争事件はあったものの、この頃の族は、とにかく改造車をいかにして走らせるか、いかにしてスピードの壁を突破するかということに熱中していた。しかも、年代層も大学生、社会人を含めて二〇代の連中が多く、ツッパリということよりもレーシングのほうに重点を置いた暴走集団だった」。しかし、その後「警視庁は一九七三年の暮れに記者会見を開き、都内を暴走するカミナリ族の数は約三〇グループ、未確認グループを含めると約五〇グループにのぼると発表。同時に、カミナリ族摘発強化を宣言した。／その中で、警視庁がとくに名を挙げたのが、四輪六〇〇人、二輪三〇〇人の全国組織を自称する最大組織『スペクター』だった。／当時から、浅草を本拠地としたスペクターは、川崎を本拠とするアーリー・キャッツ、調布を拠点とするルート20と連合し、『CRS』という巨大な連合組織を作っていた(上之, 1995: 16-8)。そして、74年には「東京サーキット族105グループが大集結する!! : 《関東連合》発会式に集まった700台のマシン群!」によって、「駒沢公園で深夜の平和会議」が行なわれたという(1974年

2月26日号『週刊プレイボーイ』)。これら70年代のモーターギャングたちは、「金持ちのお坊ちゃんの道楽というより、月々2万円くらいかかるガソリン代を自分で稼ぐ者がほとんどだ(1974年6月25日号『週刊プレイボーイ』)。

こうして50~60年代的なカミナリ族・サーキット族とは異質なクラスや年代の若者たちが、二輪・四輪を操り、騒動を引き起こしていくようになるわけだが、この時点ではまだ、「カミナリ族」「スピード族」「サーキット族」「マッハ族」「暴走族」「狂走族」——と、呼び名はいろいろあるが、とにかく土曜日の夜、時計の針が午前零時をさすころともなると、東京では、神宮外苑や青山通り、または馬事公苑周辺に、三々五々、愛車で乗りつけて、集まってくる(1974年6月8日号『週刊読売』「若者をかりたてるこの“深夜の楽しみ”：狂走族」とあるように、「暴走族」の語は、まだその地位を確立していない。「官庁語としての「暴走族」が使われたのは、昭和四十九年五月の警察庁次長依命通達「暴走族に対する取締りの強化について」が初めてである」。その後、三宮フラワーロードでの神戸祭の際に、取材カメラマンが死亡するほどの大暴動となった「神戸事件直後の五十一年五月十八日に「暴走族対策会議」新設が閣議決定され、暴走族が国政レベルでの社会問題となる」(佐藤, 1984: 12)。ある「暴走族」は次のように語っている。「わしは暴走族といういい方は嫌いだ。マッハ族、カミナリ族、カーキチ族、サーキット族という呼び方がスマートだし、若者の気持ちがいい当てている。それを暴走族にかえたんは、むしろ社会や警察やと思うが(堂城, 1982: 147-8)。

こうした騒動は新聞などで繰り返し報道され、また70年代半ばには、暴走族(予備軍)にむけた「暴走族ジャーナリズム」も登場し始めている⁷⁾(表3)。だが、この頃のファッションは、冬場は「ショッキングなカラーのヘルメットに黒の革

7) 『週刊プレイボーイ』の記者であった上之二郎は、瓜田吉寿(新宿ブラックエンペラー)に取材を繰り返し、そこから「今でも口コミで代々読みつがれていると聞く『暴走族の手記・俺たちには土曜しかない』という一冊の本が、彼との出会いから作られていった」(上之, 1980: 16-7)。こうした手記の多くは、安価な新書版であり、写真集の類でも価格は二千元までであった。佐藤郁哉による推定発行部数の調査では、『俺たちには、土曜しかない』は13万部を売り上げており、写真集なども5万部前後は出ていたようだ。中でも、「ナメ猫」をフィーチャーした『なめんなよ』は、33万5千部のヒット作となった(佐藤, 1984)。

ジャン、龍の刺繍のスーベニア・ジャンパーのヤング達」(1974年2月26日号『週刊プレイボーイ』)、夏場は「シャツ——イタリアン・カラーふうのエリ、七分のソデ、胴回りと腕に模様の入った“ハマカラ”が今夏は大流行。アロハシャツも“カミナリ族”の時代のものより、ド派手なプリントが好まれ、カラフルなカッコでアクセントを握っている」(1975年9月1日号『平凡パンチ』「夏に燃えた狂走族…総括!! : コトバ…、ファッション…、オンナ…、“目立とう精神”こそ誇り…」)とバラエティに富んでおり、固有の暴走族スタイルはまだ確立してはいなかった。

クラス、ローカリティ、マスキュリニティ

70年代中盤に行われた暴走族のメンバーに対する各種調査からは、全国で「高校生31.3%、会社員13.5%、工員・店員・職人・その他43.3%、無職・不明8%、大学生3.2%」(田村・麦島, 1975)、西日本で「学生21.3%、ホワイトカラー17.0%、ブルーカラー24.0%、店員8.8%、職人11.0%、運転手6.6%、自営業4.4%、無職・その他3.7%」(国際交通安全学会004プロジェクトチーム, 1977)と、その中心は有職者であり、やはり四輪の比重の高い西日本においては、比較的年齢層が高く出る傾向にあることがうかがえる(高田, 1975; 神戸市青少年問題協議会,

表3 暴走族関連図書一覧

《カタログ》	書名	出版社	出版年
グループ<フルスロットル>編	暴走列島'80: 全日本暴走族グラフィティ	第三書館	1979
グループ<フルスロットル>編	ボア・アップ!: 暴走列島'80part 2	第三書館	1980
グループ・フルスロットル編	レディス	第三書館	1981
会田我路(撮影)	激突暴走「族」: ひとりひとりがヒーローだ	ダイナミックセラーズ	1982
《写真集》			
戸井十月編	止められるか、俺たちを: 写真集「暴走族」	第三書館	1979
木村英輝・坪内成晃 (グループ・フルスロットル) 編	ザ・暴走族: 写真本	第三書館	1980
福田文昭(撮影)	69新宿カミナリ族はいま……: 青春ふたたび帰らず	第三書館	1980
竹村潤編	暴走族写真集: I Love Army	大陸書房	1980
観音野口	叫び: 裏街道の青春写真集	企画室リパティベル	1980
犬飼長年	写真集・暴走最前線: 止められるか、俺たちを part 3	第三書館	1981
《ドキュメンタリー(手記・聞き書き)》			
瓜田吉寿	俺たちには土曜日しかない	二見書房	1975
平林猛・朝倉喬司編	生きてる証しがほしいんだ: 「暴走族」青春のモノローグ	大和書房	1977
中部博編	暴走族100人の疾走	第三書館	1979
戸井十月	シャコタン・ブギ: 暴走族女リーダーの青春	角川書店	1980
上之二郎	ドキュメント暴走族 part 1	二見書房	1980
上之二郎	ドキュメント暴走族 part 2	二見書房	1980
上之二郎	ドキュメント暴走族 part 3	二見書房	1980
田中保次	ドキュメント暴走族 part 4 写真集: 「族」特写スーパーショット853	二見書房	1980
竹村潤編	爆走レディス: 土曜の夜はパラダイス	大陸書房	1980
秋本誠	爆走: ストリート・エンジェル	大陸書房	1980
中村喜一郎	ドキュメント暴走少年	大陸書房	1981
秋本誠	ツッパリ: 番長グループ100人の証言	ダイナミックセラーズ	1981
(構成・企画) 集団 BOX	ルージュをひいた悪魔たち: 女暴走族ドキュメント写真集	青年書館	1981
佐藤信哉	心の中のバイクを見つけよう: 暴走族だった僕の言い分	現代史出版会	1982
堂城剛	ドキュメント・暴走族	神戸新聞出版センター	1982

1977)⁸⁾。そして「総じて暴走族の将来イメージはブルーカラー、グレーカラーである。また現在、無職である者、店員である者では水商売志向が強い」(田村, 1981)⁹⁾。

一方メンバーの親たちの職業・階層に関する調査をみていくと、「東京家裁の資料から暴走族の家庭環境を見ると…父の職業では会社員、工具、公務員など外勤が最も多く四三・五%だが、これについて自営業が多く全体の約四〇%を占めているのが目立つ。一般に過程の経済状態は普通もしくはそれ以上といえよう。つまり、他の非行少年に比べると暴走族は恵まれた家庭環境におかれているといえる」(兼頭, 1975b: 26)、「暴走族の親の場合、非行少年の親に比べ可成りよく、大凡一般の家庭状況の分布に近い」(麦島・田村, 1976: 65)¹⁰⁾、「少年たちの家庭環境をみると、およそ中流のやや下というあたりのところだろうか、欠損家庭の率も多くはない(15%)。車やオートバイの購入も、彼等の約半数が親の援助によっている」(田村, 1978: 70)など、平均的な家庭に育ったことが指摘されている。

では、同じような家庭環境にあって、暴走族に「なる／ならない」を分かった要因はなんだったのでしょうか。暴走族の「特徴は、高校中退者が多いことである。すなわち、社会人中の三割を占め、中卒だけと合計して七割になっている。この高校中退を促したものは、基本的には家庭的状況であるよりも、本人の学業への態度にその大半があると思える」(麦島・田村, 1976: 65)。だが、

当然のことながら、すべての学業不振者が暴走族の成員となるわけではない。

「暴走族青少年の性格特性は、極端に高い外向性と高い神経症的傾向を示している。日本の青少年は一般に、発達につれて児童期よりも内向化する傾向が見られ、その生育環境にさまざまな内向化への文化的圧力が介在しているものと推定される。…また暴走族青少年では学業不振が著しいが、それは現代の学習過程が彼らの極端に高い外向的特性に不適合なるがゆえに生じているものと思われる。したがって、彼らの学業不振は知識の配分過程への不適応と見なすことができるが、それは同時に知識配分過程に潜在的に含まれている「かくれたカリキュラム」としての内向性志向文化への不適応でもある」(森田, 1985: 48)

その外向的な性格ゆえに学校文化との不適合をおこし、校内において「問題児」という逸脱的レベルを与えられ、その結果さらに学業不振に拍車がかかり、学外の世界へと目が向いた先にあるのが「暴走族」だというのである¹¹⁾。だが、佐藤郁哉が描き出したように、暴走行為は、学校文化から「落ちこぼれた」欲求不満や、大学進学者への劣等感からの逃避や自暴自棄ではなく、社会を覆おう全体文化としての学校文化へのオルタナティブの模索であり、彼(女)らなりの「魅力ーリスク」の追求を、その第一義的な要因としていたのである(佐藤, 1984・1985)¹²⁾。

-
- 8) その後、道路交通法の改正など罰則の強化により、暴走族は十代の一時期に通過するものとなり、低年齢化が進んでいく(佐藤, 1985; 齋藤, 1994)。
- 9) 有職者の中でも以下のインタビューにあるように、現在の職に満足しているものは少なく、やがて落ち着くまでの過渡期があると自己認識している者が大半であった。「親たちア怒ったぜ。「せっかく大会社にはいれたっていうのに」ってネ。俺の勤めていた工場は大手の電機メーカーで、世間からみれば一流企業さ。けどよオ、考えてみなヨ、高校しか出てない俺がだぜ、ビチツとしたワイシャツに背広着て東京の下真中にある本社にいけるはずはないだろう。だからって、工場の“頭”(工場長)になれるはずもない。せいぜい定年まで勤めあげて、コンペアの一つのラインのみみっちい頭になるぐらいが、俺にとっちゃア関の山なんだぜ」(平林・朝倉, 1977: 46-7)。
- 10) 保護者の職業が、ホワイトカラーである比率は、暴走族36.5%、それ以外の非行少年18.3%。以下、自営・農業は35.3%/37.4%、ブルーカラーは23.5%/44.1%となっている(麦島・田村, 1976)。
- 11) 学校文化への不適応はポール・ウィリスも描いたところであるが、イギリス社会に比して労働者コミュニティが弱く、ラッズ・カルチャーのような労働者階級YSの伝統のない日本においては、暴走族—ヤンキーカルチャーがその受け皿となった(Willis, 1978)。
- 12) 研究者がミドルクラスであるがゆえのバイアスに関して、アリ・ラタンシらは、「社会科学によって「問題のある」労働者階級の若者(少女たちを含む)へと投げかけられている、文化的剥奪の概念は、ミドルクラス文化がそれ自身にあるきびしい抑圧を課している点への看過を前提としている」と指摘する(Rattansi &

では、クラスや学歴以上に、彼（女）らの意識を占めていたものは何であったのだろうか。一つは、ひろくバイカー・カルチャー全般に見られるマスキュリニズムであろう (Schouten & McAlexander, 1995)¹³⁾。佐藤も、京都の暴走族少年たち特有の「イワす」という言葉に注目し、「[「女イワす」——犯す、「イく」／「アイツイワす」——やっつける、殴る。／「河原町イワす」——単車で河原町通りに出かけ、思いきりうるさい音を立てて騒いでくる。／「単車イワす」——盗む。／“タマる”が受動的で不活発な状態であるのに対し、“イワす”は、自分から積極的に行う能動的な行為である。…暴走は、“イワす”タイプの逸脱行動の中でも最も華々しいものであるといえる] (佐藤, 1985: 178-9) と述べている。暴走と喧嘩と性交は、その攻撃性、「男らしさ」という点では等価なのである。「私たちの調査によると、男性に比べると女性の方が暴走族に対する反感はかなり少ない。彼らに男性を感じる女性も少なくない。事実、彼らの異性交友のチャンスは多いし、集団走行中に異性を同乗させているものが多い] (千葉, 1976: 34)。「オンナはちがうよ。ウソはつくしね。あんな下等動物とは、つきあってらんないよ」(第三書館編集部, 1991: 117) と嘯きつつも、少年たちが暴走行為や暴走族文化を選好した要因には、同性の仲間との友愛以上に、異性のまなざしがあったことは確かであ

ろう¹⁴⁾。

一方、70年代後半から徐々に、女性だけの暴走族——いわゆる「レディース」——が登場してくる (竹村, 1980; 集団BOX, 1981)。

「結成式が終わってからの私たちは、いっそうまとまり、人数も増えていた。毎週木曜日アーリーキャッツ幹部会に出席、二日後の土曜の集会の集合時間と集合場所、走るコースを聞き、次の日金曜日、BABY-FACEの幹部会で、それをメンバーに告げる。そして翌日はいよいよ本番の走り…。この頃私は、車も二台目、紺のサニーに代わり、川崎アーリーキャッツについて走っていた。しかしキャッツのレディスとしてではもちろんなく、あくまで同等の立場で走っていた。それだけにつらいこともたくさんあったが、私たちBABY-FACEの名前はいいよ有名になっていった。男のバックのいない、ほんとうに純粋な女だけのチームとして] (集団BOX, 1981: 48)

だが、こうしたレディースたちの存在は、男性暴走族たちにすらも容認されない。「レディースの「卒業」を促すのは、逸脱行動に関する性的 (性別) ステレオタイプ sexual stereotype である。自分たち自身の行動については「若気の至り」あるいは“ヤンチャ”として、その道徳的意味を中和化する男たちも、女が同じような行動をとること

Phoenix, 1997: 142)。暴走族文化の中には、前世代による中産階級的なヒッピームーヴメントや学生運動への反発と、マスキュリニズムとが結びついた独特の「右翼趣味」が存在する。これは、70年代イギリスのパンク・ムーヴメントにおける、前世代や良識ある大人たちから嫌悪されんがための鍵十字の引用と通底している (現にブラック・エンペラーのシンボルは swastika であり、ヒットラーというグループ名も存在した)。日本における暴走族とパンクの結びつきに関して、元「アナーキー (亜無亜危異)」の逸見泰成は、「この雑誌って上福岡毘沙門天が載ったことあるんだってね? / 俺、OB なんだよ。茂は浦和なんだけど、しょっちゅう上福岡に来て一緒に集会行ってたよ。それで藤沼が鑿でね」と語っている (2001年4月号『BURST』)。このように、初期の暴走族にはその世代特有の事情が反映されているが、その後暴走族 (文化) が次世代へと受け継がれていく中で、世代の刻印は薄れていく。

- 13) クルマ関連の非行をはたらいた若者への調査において、「車に対する考え方を分析すると、非行少年は、一般青少年よりも、車に対する考え方に歪みが認められた。つまり、非行少年は、一般青少年よりも、遊びとしての車、スピード、セックス、いわゆるカッコのよさなどを強調するのである」(三宅ほか, 1971: 68)。
- 14) 首都圏に住む10~60歳の男女1000人に対する意識調査でも、女性の方が暴走族により好意的であるという結果が出ています。取締りへの意見としては、「“すべて厳しく取締る” でみると男性は51.2パーセント、女性は39.4パーセントと、10パーセント以上も男性が厳しい。一方、これとは逆に「目に余るものは取締る」で男性は45.0パーセント、女性は56.5パーセントとなっている。特に性差が著しいのは大学生で“すべて厳しく”では27.3パーセントも、また高校生で13パーセントも性差があった」。また、取締りに対する心情としては、「一般サンプルの38.5パーセントは“全く同情する気にならない”と答えたが、性別では男性42.2パーセント、女性34.4パーセントと10パーセント近い性差を見られ前問 (取締り全般) の回答と符合している」(後藤, 1975: 68)。

に対してはきわめて厳しい評価を下し、かつまた、レディースに対して面と向かってそれを表明する」。またレディースの側も、「インタビューの結果などをみても、『女は、男よりも早い時期にオチツクことを予想しているだけでなく、「早い内にオチツかねばならぬ」と考えている』」（佐藤，1985：227-8）¹⁵⁾。

そして、こうしたジェンダー観とともに、見逃せないもう一つの要因は、「地元」への愛着であろう。

「京都の暴走族グループの多くは、地縁的な結合、特に出身中学を単位とした結合を背景として結成されている。右京連合所属の各グループの場合も事情は同様であり、それぞれ特定の中学出身の者達为中心となってグループを形成している。単車・クルマという形での機動力をもちながらも、「地元」の特定の場所を中心とするタマリ場集団がグループ形成の母体となること、このようにテリトリーが特定の地域に限定される重要な背景となっている。／単車やクルマの機動性は、一方で、容易に他グループのテリトリーの侵犯という事態に結びつく」（佐藤，1985：77-8）

かくして遠くの高校に通い、最終的には大学進学を機に地元を離れるかつての同級生たちとは、異なる文化圏が形成されていくのである¹⁶⁾。

メディアエイトッド暴走族

だが、そうしたローカリティへのこだわりにも関わらず、70年代後半、かつての「西日本型／東日本型」の区別は消え去り、暴走族のスタイル——ファッション・身体技法・行動様式など——は全国的に平準化していく。そこには先述のように、『平凡パンチ』や『週刊プレイボーイ』などの男性誌をはじめとした、暴走族ジャーナリズムの存在があった¹⁷⁾。ある暴走族OBの手記に曰く

「もっと、暴走族らしくやってくれないかなあ——、取材でやってきたっていう、雑誌のカメラマンがこういったことがあった。暴走族をテーマにした“体験ルポ”だの、“同乗記”だのって記事をこしらえるためにね。…カメラを向ければ、暴走族はイキがった表情にガラッと変わる——、…たしかに、注文に乗ったオレたちも馬鹿だったとこはある。なんとか、ほかのグループとは違う、怖くて、カッコいいグループに思われよ

- 15) 1978年8月3日号『アサヒ芸能』「湘南一帯をぶっ飛ばした 少女暴走族106人大胆不敵な暴行の日日」には、地元記者の声として「彼女らは男の暴走族の集会に参加したり、彼らのマスコットの存在だったようだな」「彼女らのほとんどが毎度のことながら「中流家庭」（前出・地元記者の話）だといわれる」とある。90年前後のレディース（さらにはその後のヤンママ）ブームに関しては、「他誌とは違い女の子が読者。そのため単車やクルマではなく、人物にスポットを当てている。「レディース」ブームを巻き起こした」（ヤングオート編集部，1994：181）という『ティーンズロード』（ミリオン出版、1989年創刊）など、雑誌メディアが大きく介在している。
- 16) こうした若者たちのたまり場として、70年代急速に郊外へと普及していったファストフード店やコンビニエンス・ストアが利用された（マクドナルド1号店は71年に、セブンイレブン1号店は74年にオープンしている）。「コンビニの前でしゃがみ込んでいた当時（80年代半ば）のヤンキーたち。地域共同体も家族共同体も解体したとき、最後の居場所を提供したのが、地域社会の「深夜の誘蛾灯」コンビニだったが、そのコンビニこそは、地域や家族に根ざした最後の共同体を崩壊させる役割を担った張本人だった。なぜなら、コンビニ、そこで売られる告白投稿誌や投稿写真誌、個室化した電話、という組み合わせこそが、若い身体を、家にも学校にも地元にも属さない「第四空間＝街」へと解き放ったからだ。／彼らは、家・学校・地元で親や教師に反抗するのをやめ、むしろ適当にやりすごして「いい子ちゃん」を演じつつ、眼の届かない「街」で、奔放に、あるいは「まったく」とくつろぎはじめる。郊外に集うヤンキーたちは消え、ストリートに集うチーマーにとって代わられた。同じ共同体のメンバーの視線がなければ何だってできる「凡庸な日本人」である彼らは、街で何をしようが平気になっていったというわけである」（宮台，1997b：81）。
- 17) 女性でありながら、キラー連合四千人のヘッドであったケイ子にテレビ取材を申し込むと、「地元（千葉）の某所に、数百台の四ツ輪（四輪の車）と単コロ（オートバイ）を集めるという」（戸井，1980：4）。また関西連合の会長は、「マスコミが暴走族ゆうたらみんな東京や。あれにはごっつう腹立つ。なんで関西さいへんのかなあ、雑誌社になしとんねんと、考えた時もあったしねえ」（第三書館編集部，1991：201）。「マスコミのもつこのような一面と暴走族の関連は、昭和五十五年八月に広島で起きた、暴走シーンの撮影をしていたカメラマンに対して「共同危険行為」の教唆が初めて適用され書類送検された事件をはじめとする、一連のジャーナリストによるいわゆる「やらせ」（報道のために、ある出来事をその関係者に報道しやすい形で再現してもらうこと、あるいは新たに演じてもらうこと）の暴走に如実に表れている」（佐藤，1984：232）。

うって、さんざんつくったからね。もともとが、目立ちたがり屋の集まりだからさ、もう必死。…結局、「商売」なんだよ。「こいつらのことを書いてけば、世間の読者は読んでくれる」って思っただけの話だよ。「暴走族産業」な。オレはマスコミのことはよく知らないけど、車の部品やアクセサリーを卸してる会社で働いてたことがある。そこの社長がいったよ。「暴走族がいなくなったら、まあ、7割ぐらいのパーツ・ショップはツブレちゃうんじゃないかな」ってね。雑誌や本の世界でも、同じようなことはあるんじゃないかと思うよ」(佐藤, 1982: 119-121)

現に出版業界の一部は、『『暴走族100人の疾走』『止められるか 俺たちを』の二冊で『暴走族本は売れる』』ということが証明された。以後、本という形で暴走族は、出版社から「私たちは暴走族を理解しています」というポーズが取られつつ、「食い物」にされまくる。…暴走族本は、彼らがほぼ鎮静化する83年までに、少なく見積もって合計百五十万部が発行された」(土田, 1997: 102) というように、まさに暴走族産業の様相を呈していた。

また佐藤郁哉も、「“取材”け?”/“第三書館の人け?”/“『暴走列島』け?”/“『暴走列島'83』出るの?”/フィールド調査の間には、特にその初期、また、調査がかなり進んだ段階においても、インタビューなどをしていて、そこにそれまで面識のなかった者がいあわせたりした場合など、幾度となくこのような質問に答えねばならなかった。なかには、「どこの書館や?」と聞く者さえもいた」(佐藤, 1984: 230-1) と述べている。こうした全国暴走族一覧の「カタログ」に自らのグループを売り込み、自らのグループ名の出した新聞記事をスクラップするなど、暴走族の側

は、マスコミを単に「モラル・パニック」を引き起こす反作用としてだけではなく、自らの存在を誇示するメディアとしても位置づけていた。また76年には、当時東京で最大の勢力を誇ったグループを追ったドキュメンタリー映画『ゴッド・スピード・ユー! Black Emperor』(柳町光男監督)が公開されている¹⁸⁾。

こうしたメディアに媒介されることで、当初は思い思いのかつこうをしていた暴走族も、やがて特攻服スタイルへと一元化されていく。「(特攻服)スタイルが一般化するの77年大井埠頭事件以降である。…元一寸法師の山村氏も、特攻服を着るようになったのは78年頃からだと言う。/「入ったころはドカジャンって呼んでる作業服や革ジャン。オートバイのときは太い作業ズボンにブーツはいて革ジャンにリーゼント。ツナギなんかも着ましたね。夏は甚平。出かけるときはサファリスーツとか。特攻服は上野の日の丸堂というところで買って、刺繍も入れてもらいました」(永江, 1999: 46-7)。また、難解な漢字を多用したグループ名やステッカーの作成なども、全国的な暴走族文化として共有化されていく。この70年代後半の状況について、関西をフィールドとした研究者は次のような証言を残している。

「道交法改正のために消え去るといので、その記録を残すと称し、暴走族の写真とか、プロフィールが一時期パッと出ました。これは、かなりの売れ行きを示しましたが、読んでいるものは、対策にあたっている人たちよりも、どっちかという、暴走族自身の方に回っているわけです。この暴走族のパターンは東京が主で、箱乗りはするし、旗を振るし、鉢巻をするし、というような非常に攻撃性の強い写真がでております。…

18) 70年代、すでに「若者向けクルマ雑誌のバイオニア。人気は Oh! my 街道レーサー」という『ホリデーオート』(モーターマガジン社、71年創刊)はあったが、暴走族ないしヤンキー向け雑誌は80年代に族生している(ヤングオート編集部, 1994)。映画では、娯楽作品として石井輝雄監督・岩城滉一主演の『爆発! 暴走族』(75年)・『暴走の季節』(76年)、内藤誠監督・館ひろし主演の『地獄の天使 紅い爆音』(77年)などが公開されている(いずれも東映)。一方マンガに関しては、『BE-BOP HIGH SCHOOL』(きうちかずひろ)・『シャコタンブギ』(楠みちはる)・『湘南爆走族』(吉田聡)・『ホットロード』(紡木たく)・『ハイティーン・ブギ』(牧野和子)などはいずれも80年代に入ってから作品である。また、若者向けテレビ番組が、最新の若者風俗として暴走族をとりあげることもあった。「昔、エンペラーの千歳台の支部が、先輩から「まとまってない」って言われたことがあったんだ。/で次の日、支部の全員が、頭を逆冪の形に頭を剃ってきたんだよ。…あの時は、それでTBSの“ギンザ・ナウ”のヤツらに追いかけて、もうタイヘンだったよ。あんなの、ガキの番組だよ。出てらんないよ」(第三書館編集部, 1991: 116-7)。

それがモデルになって、「暴走族かくあるべし」というように、若ものたちを刺激した面がかなり強いのではないかと思います。現在走っている姿に見られるように箱乗りをしたり、火のついたたいまつや鉄パイプを持って乗っている姿などは、むかし大阪方面ではなかったのですが、その写真集にそういう写真がいっぱい載っているわけです」（神戸市青少年文化研究所，1980：3-4）。

「ヤンキー」スタイルの消費へ

70年代に暴走族が社会問題化され、多くの取締りの強化が行われた結果、80年代には暴走族の小

規模化、成員の低年齢化が進んだ（表4）。また、暴走行為の際の制服として特攻服が定着するにつれ、いわば私服としての暴走族スタイルである「ヤンキー（テイスト）・ファッション」が、広く一般に普及し、日常へと拡散していった¹⁹⁾。

「竹の子族に負けるナ、と大阪最新風俗は「ヤンキー」 東京・原宿の竹の子族やロックンローラー族に負けじとばかり、いま大阪の街をカッ歩しているのが、誰が名付けたか“ヤンキー”なる連中。目立ちたがり屋の若者たちだ。／そのスタイルたるや、男なのに女性用のサンダルをつっか

表4 1969～79年暴走族関連年表（中部，1979；戸井，1980）

1969年	5月17日	名古屋・テレビ塔周辺でカミナリ族が、群衆約2000人をまきこみ大暴れ
	5月26日	東名・名神高速道路が全通
	7月19日	警視庁は新宿副都心のカミナリ族約200人と見物人約5000人を完全規制
	10月1日	交通違反点数制度がスタート
1970年	8月19日	映画「イージー・ライダー」公開
1971年		この年、全国自動車保有台数が2000万台を突破し、完全なマイカー時代へ
1972年	6月17日	富山事件。富山駅前のサーキット族100台以上と見物人約2500人が暴徒と化す
	6月19日	警視庁による都内のカミナリ族グループの補導開始
	7月2日	暴走騒ぎが金沢市、小松市、岡山市に広がる。以後全国に飛び火
1973年	10月26日	警視庁は都内150ヵ所で変形ハンドルの一斉取締りを実施
1974年	1月5日	東名高速・海老名事件。ヒッター約100人とアーリーキャッツ約100人の衝突
		暴走族の本格的な対立抗争時代の幕開け。全国各地に連合組織が誕生
	5月24日	警察庁は暴走族解体作戦を全国に通達
1975年	1月18日	湘南片瀬海岸での大乱闘事件（暴走族7グループ、約700人）
	6月8日	鎌倉七里ヶ浜事件。東京連合・神奈川レーシング連盟双方約600人が大乱闘
	7月24日	警察庁はオートバイ免許制度を3段階にすると発表。実施は10月1日から
1976年	5月15日	神戸祭事件。暴走族と群衆が暴動を起こし、カメラマン1人が死亡
	5月22日	警察庁は暴走族対策連絡室を開設
1977年	9月17日	大井埠頭乱闘事件。11グループ約3500人が集結。スペクターと極悪が衝突
1978年	1月27日	関西最大の日韓連合（13グループ約700人）が、大阪府寝屋川署に解散届を出す
	9月7日	警察庁は「最近の暴走族の実態」を発表。低年齢化、凶悪化、レディースの急増等
	12月1日	新道交法施行。「68条共同危険行為等の禁止」の新設
1979年	12月18日	警視庁は、道交法改正以後、暴走族7割減を発表

19) 暴走族と竹の子族との関係に関しては、「[バリバリ][ビツとする]のほかにも、「ビシバシ」「全開」「ハンバじゃない」など、やよいをはじめ「竹の子族」が好んで使う言葉には、暴走族由来のものが多。暴走族風といえ、二〇以上はあるというグループ名もそうだ。「流珠（ルージュ）」、「紫留美重（シルビア）」、「不恋達（フレンズ）」、「麗羅（レイラ）」、「嫉妬心（ジェラシー）」……。思い思いの英語に漢字をあてた独特の名前で、自分たちのグループを呼んでいる」（NHKアーカイブス番組プロジェクト，2003：275-6）、「1979年からは原宿の歩行者天国が始まったため、週末はディスコで日曜はホコ天でという活動パターンになる。1978年12月から施行された新道交法の影響で、暴走族をやめて竹の子族やロックンローラー族に転向した少年少女たちがたくさんいた」（柄内，1999：94）など。

け、そり込みを入れたパーマ頭に黒っぽいカーディガン。これだけでも異様なのに、集団でガニ股で歩きまわり、街のそここにしゃがみこんで煙草をふかすのだから、人目を引かぬはずがない。／もちろん女の子の“ヤンキー”もいる。こちらはチャイナブラウスにタイトスカート。色はやっぱり黒が主体で、こちらもサンダルを愛用しているのだ。／要するにツッパリの変形なのだが、どことなく野暮なところがいかにも大阪らしい(1983年11月3日号『週刊文春』)

このヤンキーには、「ヤンチャ」(関西弁で悪戯者くらの意)の転訛とする説があり、「関西＝ヤンキー／関東＝ツッパリ」という対比において語られることが多いが、「ロックンロールグループ〈キャロル〉がノシてきた今年の4月頃から、六本木に集まるヤング層が変わってきた。まず、年齢層が下がって、17～20才ぐらいが主流になった。／ファッションは、〈キャロル〉のメンバーのように、概してヤンキースタイルが多いが、どこかで自分の個性を出す工夫をしている」(1973年6月19日号『週刊プレイボーイ』「わが編集部は土曜日の新六本木族を〈キャロル野郎〉と呼ぶ」とあるように、70年代に「コンボラ」と呼ばれるスーツやリーゼント・ヘアをきめて、ソウルやファンクなど、ディスコ・ミュージックで踊っていた遊び人たちのファッションを指す用法もある²⁰⁾。現在、ドメスティックな感覚や文化の代名詞的に使われる「ヤンキー・カルチャー」も、その出発点には、ロックンロールや派手な色使いのファッションを楽しむブラック・カルチャーなど、文字通りのYankee cultureの影響

があったようだ。

だが、その後の展開は、こうした原義を雲散霧消させていく。「ヤンキーファッションは、他の多くの若者のファッションとは異なり、外国から輸入されてきたものでもなければ、はじめから大手の衣料メーカーによって意図的に案出されたものでもない。ヤンキーファッションは、若者の間から自然発生的に生まれ、それが主に中小の衣料メーカーによって商品化されてきたのである。過去一〇年来、ヤンキーファッションの中でも様々な流行とバリエーションがあった」(佐藤, 1985: 130)。もちろん、このヤンキー・ファッションにも、マスキュリニズムが潜んでおり、「衣服およびしぐさの面で独特のパターンをもつヤンキースタイルあるいは“ヤンキー”というよび名それ自体について、ヤンキーたち自身は一面で「ヤンキー魂」とでもよべる自負をもっている。…ヤンキースタイルは、彼らにとって一種のおとこらしさ 俠気の表現でもあれば、美的なセンスの表現でもある」(佐藤, 1985: 134)。そして、80年代当時の他のYSとの関係で言えば、「竹の子族」「サーファー」「テクノ」「ニュー・ウェーブ」のような軟弱ないしユニセックスな連中との間に、彼らなりの「男らしさ」という一線を画そうとしているのである²¹⁾。

だが、いくらヤンキーとは精神のありようだと言っても、その「バリバリ」加減や「ハンパじゃない」度合いは、ファッションや外見を通してまず表出されるものであり、それは何らかの消費を通じて達成されるものなのである²²⁾。消費者行動論からのバイカー・サブカルチャー研究において

20) 70年代前半、「ヤンキー・ファッション」の語は、文字通りアメリカ出自のファッションであり、米兵の遊び着スタイルの模倣を意味していたが、その中の一分派——「ヨコスカマンボの硬派といっしょになり、髪はパーマをかけたり、リーゼントにしたり。…スラックスはオリジナルのハイウエスト。…シャツもオーダーで玉虫からしぶい模様までいろいろ。スーツはもちろんコンボラ」(今井, 1985: 290)——から、今日的な意味でのヤンキー・ファッションが派生してきたものと思われる。

21) 一方、「七〇年代の前半が“ヤンキー”の全盛期だ。…七〇年代も後半に入ると、その次は“サーファー”の全盛期だ。七〇年代の二大若者風俗は、その後もスタイルを変えながら、シツコク大阪に根をはっている。ちょうど“ヤンキー”と“サーファー”の交代時期には、“ヤンキー”が週末にはサーフィンに出かけるという、“ヤンファー”もいたということだ」(山口, 1992: 56-7)。

22) 音楽の消費という点では、海外のバイカー文化ほど(Willis, 1978)、日本の暴走族と特定の音楽ジャンルとのつながりは明瞭ではない。しかし、外道(73年デビュー)とサーキット族の親密な関係や(野間, 2004)、キャロル(72年)、ダウン・タウン・ブギウギバンド(73年)、クルース(75年)などの「ヤンキーロック」も存在した(大山, 2003)。

「消費のサブカルチャーはわれわれの社会に遍在し、日常の領域にまで十分に拡張している。…われわれの消費者文化においては、人々は自身を社会的な構成にしたがって規定しているのではない。人々は、その生に意味を付与する行動やモノ(objects)、関係などの観点から、その規定を行っている。とりわけ、消費の対象たるモノこそが、社会的な世界における自身の位置を具体化している。モノを通じて、人々は、他の人々と関係し、価値や興味を共有しているか否かを判断している。消費行動を通じて、意味や相互支持の共有を許容する関係を築きあげる。その関係と活動は、消費のイデオロギーによって支配されている。こうした消費のイデオロギーの周囲に、消費者は、自身のカテゴリーを構築し、そうしたカテゴリーは消費のサブカルチャーを規定する」(Schouten & McAlexander, 1995: 59)

と指摘され、「目にみえるコミットメントの指標は、タトゥーやモーターサイクルのカスタマイゼーション、クラブ特有の衣服、さまざまな栄誉や達成、ラリーや他のライダーイベントへの参加を示す縫い付けられたパッチやピンを含む。ヒエラルキーのステイタスは、グループのライディング・フォーメーションにも反映されている」(Schouten & McAlexander, 1995: 49) と語られているのと同様、日本の暴走族ないしヤンキーたちも、結果的に「暴走族産業」を支えることになる。暴走族の間では、「キャブレターは、ソレックス、ウェーバーあるいはデロルトのそれであるか、それとも名もない「△×工業」のそれであるかでは格段の違いがあるし、単車のミラー一つにしても、「モッサイ」メーカーの純正部品とナポレオンのそれでは持ち主のセンスに対する評価がまったく違うのである」(佐藤, 1984: 97) といった具合に、ブランド志向という点では、次に

扱う「クリスタル族」と暴走族-ヤンキーとは、通底する部分がある²³⁾。このような時代精神の共有を前提としつつ、以下、これら二つのYSの差異を確認しておきたい。

【2】クリスタル族：クラスとテイストのセクト

25年後の太陽族

1960年に10.1%に過ぎなかった大学進学率は、70年には23.6%、75年には37.8%と急上昇を遂げる。また大学在学者数も75年には200万人を突破し、56年時点の約5倍にまで達している(東洋経済新報社, 1985)。その結果、前章の暴走族-ヤンキーカルチャーが、高校生ないし高校中退者を中心としていく一方で、エリートとしてではなく、大衆としての大学生をベースとした「学生文化」が、70年代を通じて浮上してくることになる。この二つのYSないしは社会空間の分化は、80年代に入り、より明瞭なものとなっていく。その顕在化の大きなきっかけが、80年、石原慎太郎と同じく一橋大学在学中の田中康夫によって書かれた小説『なんとなく、クリスタル』であった。青山学院とおぼしき大学に通い、モデルの仕事をし、ミュージシャンの彼と都心のマンションに同居する女子大生の日常を描いたこの作品は、同年の文藝賞入選作となり、翌年単行本化され、ベストセラーとなる中で、多くの議論を巻き起こすことになる。

「テニスの練習がある日には、朝からマジアカフィラのテニス・ウェアを着て、学校まで行ってしまう。普段の日なら、気分によってポート・ハウスやブルックス・ブラザーズのトレーナーを着ることにする。スカートはそれに合わせて、原宿のパークレーで買ったものが多い。／でも、一番着ていて気分がいいのは、どうしてもサン・ロー

23) 日本語の「雪」にあたるものに対し、17の言葉を有するイヌイットの例を引きながら、ハーヴェイ・サックスは、「若者たちが車について五十七ものカテゴリーをもっている…、若者たちがそのようなカテゴリーをもち、こうしたカテゴリーに焦点を合わせているという事実は、ある安定的な文化に対して多かれ少なかれ根本的な攻撃がなされていることを示す。その文化は世界をあるがままのものとして見るすべての人々に準拠する限りにおいて安定的なのである」(Sacks, 1979=1987: 35)。また佐藤郁哉は、「彼らは、また、文学愛好家が文章のスタイルで作家を見分けることができるように、改造のスタイルの微妙な違い(単車の場合は、排気音とアクセルのふかし方)で仲間を見分けることができる。仲間とそのクルマの特徴は分かちがたく結びついているのである」(佐藤, 1984: 104) と述べている。

ランやアルファ・キュービックのものになってしまう。いつまで着ていても飽きのこない、オーソドックスで上品な感じが魅力になっている。／六本木へ遊びに行く時には、クレージュのスカートかパンタロンに、ラネロッシのスポーツ・シャツといった組み合わせ。ディスコ・パーティーがあるのなら、やはりサン・ローランかディオールのワンピース」(田中, 1981→1985: 44)

この作品では、こうしたブランド名などに一々脚注がつけられ、小説であるとともに、当時の若者のライフスタイルに関する批評ないしはガイドブックの体裁がとられている²⁴⁾。これは、70年代に登場した若者向けファッション雑誌——特に「カタログ雑誌」と呼ばれたもの——のパロディであり(前田, 1982)、小説中に登場する「ポパイ少年」や「J・Jガール」の語には、それぞれ「平凡出版(現マガジンハウス)発行の『ポパイ』のコンセプトに合った若者を指します」「光文社発行の『J・J』のコンセプトに合った女の子を指します。いまや、「ごく普通の“シーラカンス・レイヤード”女子大生」が見る雑誌です」といった注が付されている(田中, 1981→1985: 29-30)。

田中自身は、自作について次のように語っている。

「居直るようだけど、ぼくは中身が空っぽなのがいまの若者たちの生活だ、と思いますね。「もう頬づえはつかない」や村上龍さんのように、悩みや怒りを描いた青春があってもいいが、何にも悩みがなくて、“何となく気分のいいもの”を買ったり、着たり、食べたりしながら、“何となく”毎日を過ごしている若い人が東京にはあふれてますよ。いまの時代を象徴したごくふつうの男の子

や女の子がなぜ、文学によって記録されないのか、ぼくは不満だったんですね。…これだけ豊かな消費文化の中にあっても、彼らが自分を見失っている、とはいえない。さまざまな情報をノイズとシグナルに振り分ける感覚はいままでの世代にないものでしょう。クリスタル、つまり水晶に入った光は直進せずに水晶によって方向を変えられる。雑ばくな情報をより分ける個人個人の感覚は大事にしたい。それがクリスタルな、生き方、だと思えます。／渋谷公園通りを男の子と腕を組んでデートしても、自分の部屋に帰ったら、何かむなしい、だろうと思えます。つくられた風俗に乗ったクリスタルな選択ではないから、です」(1981年1月14日付『朝日新聞』「'81新人・旧人：田中康夫氏クリスタル族」)

「昔、たとえば学園紛争のころとか、安保闘争のころには、皆ほとんど同じセリフを吐いていたんじゃないかと思えます。でもぼくらの世代というのは、たとえば『ポパイ』がこういう、『an・an』がこうしようといっても、全員がそうするわけではない。その中から自分の関心のあるところだけを選び取っているわけです。…誰でも身近に感じるんですね。太陽族のころ、ヨットに乗れる人は少なかったし、村上龍さんの小説の主人公のように福生^{ふつき}で薬をやる人は少ない。ところが、ブランドを一個持てたら誰でも気持ちの上ではこうなれる。誰もが私のまわりでも起こりそうな話ととっています」(1981年4月号『中央公論』「座談会 新入社員はクリスタル族」)

このような田中の小説や言動に対しては多くの批判がなされたが(栗原, 1981; 門脇, 1992)、「クリスタル族」「なんクリ族」は、一種の流行語ないし流行現象として、80年代前半の文化状況を表

24) 当初『文藝』誌上で発表された際の注の数は274個、その後単行本化された時点では442個に増えている(Field, 1987)。これは、ガイドブックとしてより有効であるための改訂であった。こうしたブランド志向の前提には、より大衆化されたスポーツ(ウェア)ブームがあった。「昭和四十八年、テニス界の女子プロ来日とともにミッチーブーム以来のテニスブームとなる。彼女達のTVを意識したカラーウェアは、それまでの“白”を圧倒する。さらに、五十二、三年を境に、フィラ、エレッセといったイタリアンデザインのウェアを着て戦う選手が増すにつれ、テニスをしない人々をも巻き込むテニスウェアのタウンカジュアル化が進み、クリスタル族のブランド指向を強めることになった」(河出書房新社編集部, 1982: 172-3)。ブランドものスポーツウェアの流行は、アメリカのhip hopやイギリスのcasualsなど、世界的なトレンドでもあった(Polhemus, 1994)。

す象徴的な存在として注目を集めていく²⁵⁾。

そしてブームが一人歩きする中で、クリスタル族と、本来田中が冷笑していた「JJ ガール」(とそれに群がるポパイ少年たち)とは等置されていく。そのJJガールのスタイルは、70年代中頃に神戸から広まった「ニュートラ」や²⁶⁾、70年代後半横浜を発祥とする「ハマトラ」であった(三田村, 2004)。中野翠は75年当時を振り返って

「海外ブランド・ブームの日本的展開である「ニュートラ・ファッション」というもののがはやったのも、この年の頃ではなかっただろう。／エルメスやグッチふうの馬具模様やわけのわからない連続模様のブラウスの衿もとに二連三連のゴールドのチェーンを垂らす。バッグやベルトや靴には、がっちりとしたゴールドの金具があしらってある——という、なんだか金持ちおばさんふうのスタイルである。／「真面目で清楚な感じ」と男の人たちには評判がよかったようだが、私は大嫌いだった。私には絶対に似合わないというのが一番の理由だが、どうもあのファッションには不純なものがあるような気がして、いらつくのだった。「美」とか「かっこよさ」とか「面白

味」というものよりも、生まれ育ちのいい安心な女の子に見られたいという「計算」「打算」「世間への媚態」が優先されているようで、ファッション的にはまったく不純に思われるのだった」(中野, 1999: 211-2)

と述べている。そして、このニュートラの流行とともに『JJ』は部数を伸ばしていった²⁷⁾。

「75年以前、女子大生が読むことのできるファッション雑誌はan anとnon-noの2冊しかなかった。「an anは読むにはおもしろいけれど、学校に着て行ける服が全然載っていない」のに比べ、「最先端ではないけれど、実用的でお小遣い買える服がいっぱい」という理由でnon-noは女子大生に高く支持されていた。／ところが75年春に“JJ”が登場する。青山学院をはじめ、その後いわゆるJJガールを輩出するキャンパスのあちらこちらではJJを囲む女子グループが数多く見られた。／創刊号の特集は「ニュートラ 横浜・神戸・東京・大阪 スナップとお店ガイド」、その後「街角のビッグスナップ」とタイトルを変え、ワンシーズンに1度必ず行われたヒット企画の

- 25) たとえば女性誌の中でも、1981年3月3日号『週刊女性』「クリスタル族おもしろカタログ」、1981年6月2日号『週刊女性』「週刊女性後援ミスクリスタルコンテスト」など肯定的にとらえるものと、1981年6月11日号『女性自身』「クリスタル・ギャル62人に街頭インタビューしたら 3人に2人は「鈴木首相の訪米」を知らなかった!」、1981年6月23日号『ヤングレディ』「どうして? クリスタル族、パープー学生ばかりが目立つの?」など否定的に揶揄するものとに分かれていた。こうした喧騒の中で、79年にオープンしたポートハウス(特にそのカラフルなトレーナー)は、すぐさま「若者を思いのままに動かすパワーを持っていた『JJ』や『POPEYE』といった雑誌に「ポートハウス」が紹介されはじめ、こんなに近くにいる(大学の西門から「ポートハウス」までは徒歩四十秒)青学生ですら、手にいれることが困難になってきたのが翌年。その翌年には、竹下通りで偽物が登場」(山田, 1991: 62)という人気を博した。
- 26) 『なんとなく、クリスタル』の主人公由利も神戸の出身という設定。その友人の早苗は、典型的な「ハマトラ」として描かれている。「海外旅行ブーム、アンアン、ノンノという女性誌の創刊など海外の一流ブランドに関する情報が豊富になったことも手伝って、本物志向は次第に、ステータス志向を伴ったブランドブームをまき起こした。神戸を中心としたアメリカンインポートファッションが更に少し遅れて関東風の形をつくりあげ、総称してニュートラファッションとよばれるようになったのがこの頃である。化粧のブラウス、金具つきのスカート、ブランド物のスカーフ、バッグ、アクセサリ、一見何げないがひとつひとつは本物で、というスタイルはハマトラ、JJファッションの原型であった」(1981年2月号『アクロス』「現代若者風俗大研究《タコッポ》カタログ」)。また、1979年10月11日号『an-an』「ファッション系統図」では、「ハマトラ」や「オーサカ・サーファー」と並んで、「コーベ・エレガンス」が、「神戸の女の子には、東京にもヨコハマにも負けないぞ、という心意気と突っ張りがある。一昔前にはグッチやセリーヌできめていた彼女たち、最近ブランド離れして、さらに一点豪華主義を追究中だ」と解説されている。
- 27) しかし、ファッション雑誌の細分化が起こる以前のことなので、80年代にはニュートラ(ひいては『JJ』)を批判した『an-an』も、1974年9月20日号『an-an』「サンブラザの新しい波 いま神戸で」、1975年1月20日号『an-an』「いま話題のニュー・トラって何? 東西でモデルがまったく違う…」、1976年12月20日号『an-an』「東急沿線 vs 阪急沿線 東西ニュートラ・スナップ大全集」など、70年代には繰り返しニュートラを特集していた。

ベースである」(フジテレビ, 1991: 58)

そして、「街のJJ化ともいえるほど人気を呼んでいる『JJ』誌」や「全国女子大生がJJ化し、その卒業生(家事手伝いを中心とする)にニュートラ旋風が吹き荒れる」(1981年5月号『アクロス』「ファッション誌を斬る!」)といった狂騒を経て、高級海外ブランドがその流行により、差別化へのアイテムになり得なくなるにつれ、「ニュートラ≒JJガール≒クリスタル族」は、80年代中盤に向けてのDCブランド・ブームにとって代わられることになる²⁸⁾。

消費するアイデンティティ

こうしたJJガールを典型とするクリスタル族は、先行するアンノン族との間に、雑誌メディアによって媒介されていた点、その雑誌が神戸・横浜などをフィーチャーし、70年代を通じて原宿界隈に集積しつつあったファッション産業と連動していた点など、多くの連続性が見られる。しかし、『an-an』が短大生・大学生・OL・家事手伝いなどの女性を旅に誘ったのに比して、『JJ』はあくまでも主に大学生を、都心(ないし海外)でのショッピングやレジャーへと向わせたのである。

そして、81年の調査結果に「昭和四〇年に他府県から東京都に流入した新規学卒就職者数は、中

卒五万八〇〇〇人、高卒八万八〇〇〇人を数えていた。しかし、こうした流入者数は以後急減し、地方から東京への若者の流れは大きく縮小した。今回の調査では、現在東京に住む若者のうち、「都内出身者」が七四%に対し、「都外出身者」は二六%と、四人に三人が「東京っ子」で占められているという結果になった」(総合研究開発機構, 1983a: 16)とあるように、クリスタル族自体は、東京山の手に住む私立大学生(その中心は内部進学生)を核とした特権的な「遊び人文化」——プロト太陽族からみれば著しく大衆化されたものではあったが——だったといえよう²⁹⁾。そして80年代には、そうした東京における情報は、若者向け雑誌に載ってすぐさま全国へと波及していった³⁰⁾。

84年に都内で行われた調査によれば、現代の若者には「感覚的」「遊楽主義」「仲間志向」「計算高さ」「モラトリアム」「目立ちたがり」といった特徴があり、若者ファッションにはJJ派・ノンノ派・アンアン派・ポパイ派・メンクラ(Men's Club)派の五つの主要な流れがあるという(博報堂生活総合研究所, 1985)。JJ派中のオピニオン・リーダーは、「シュウ・ウエムラで基礎化粧、メサでヘアカット(ワンレングス)、ウノア・エレの18Kネックチェン・プレスレット、和光で買った総レースのブラウス、ボルボネーゼの

- 28) 1981年9月11日号『an-an』「脱・ニュートラ」特集の、中島梓「ニュートラには言いたいことがある」というエッセイ中には「上司、親、彼が喜ぶから」なんていう自主性のなさが、まず気に入らない」とある。以後、1981年9月18日号『an-an』「田中康夫・神戸特派 ニュートラ発祥の地に変革を見た」、1982年3月5日号『an-an』「アンアン・ルポルターージュ 風俗としての大学 不正入試を生むほど人気がある青学生の見事なワンパターンぶり」、1983年9月5日号『non-no』「特別パロディー企画 JOCUS 曇ってきたクリスタル 都心から2時間の厚木校舎に通う青学生」、1984年3月16日号『an-an』「くたばれオールナイターズ」といった記事が誌面を賑すことになる。
- 29) 81年の調査では、東京の若者の31.9%が親元から離れたと思っているのに対し、そう思わないものは66.5%に達していた(総合研究開発機構, 1983a)。こうした若者の多くは、拡大を続ける第三・第四山の手に住んでいた(アクロス編集室, 1986・1987)。
- 30) 81年当時、東京の若者が好んだ雑誌は、「1ぴあ 2JJ 3少年ジャンプ 4ノンノ 5少年マガジン 6セブンティーン 7少年サンデー 8プレイボーイ 9少年チャンピオン 10別冊マーガレット」といった順位であった(総合研究開発機構, 1983a: 170)。一方、82年の調査によれば、「地方都市の若者に最も人気のある雑誌は『少年ジャンプ』であり、続いて『non-no』、『少年マガジン』、『少年サンデー』、『マーガレット』の順となっている。…以上が、ベスト5である。6位から10位は、『週・月刊プレイボーイ』、『JJ』、『少女フレンド』それに『more』と『PHP』であり漫画誌もあるが、多少活字の入った読みものも入ってくる」(総合研究開発機構, 1983b: 225)と、都鄙の差はさほど感じられない。また、オシャレなブランド大学とはされない大学の学生も、よく読む雑誌として「(男性)ぴあ71.2% GORO48.1% ポパイ39.8% 月刊プレイボーイ27.6% アンゲル24.8% FMレコパル24.3% メンズクラブ23.2% ホットドッグプレス19.9% 写楽18.2% ナンバー14.4%、(女性)ノンノ75.0% ぴあ68.8% JJ50.0% アンアン48.0% アンゲル16.7% モア10.5% FMファン10.4% GORO8.3% 月刊プレイボーイ8.3% ナンバー8.3%」を挙げている(桜井, 1982)。

シオルダーバッグ、エルメスのリストウォッチ、カルチェのゴールド指輪、ブルーノ・マリのプレーンなパンプス、ジョルジョ・アルマーニのスーツ」などによって、またフォロワーたちは「クロードモネ渋谷店（レイヤード）、アイシャドーはレブロン・チークはブルジョワ・リップはサンローラン、オックスフォードのブラウス、クリスチーヌのカーディガン、レノマのセカンド・バッグ、ヴァンドーム青山で買ったプレスレット、レブロンのマニキュア・パールピンク、アルファ・キュービックのスカート、レーシーな白タイツ、ブティック・オーサキのパンプス、「毎日、帰りに広尾ピラミッドでお茶して帰ります」などのブランド名や固有名詞によって、その輪郭を描き得る人々であった。また、この調査では「JJ派」を女性に限定しておらず、この派のリーダーたちは、『ポパイ』・『ホットドッグプレス』・『an-an』・『JJ』・『フォーカス』などを、男性誌／女性誌の区別なく目を通す一方で、フォロワーたちは少年マンガ誌や女性週刊誌をより多く支持し、また『non-no』は双方に高く支持されているという。この調査にいうところのJJ派こそが、クリスタル族（の後継）であるわけだが³¹⁾、そこにリーダー／フォロワーという格差が生じており、それは単なる嗜好（の先進性の度合い）の違いではなく、上述の小物類が前者と後者では桁が一桁異なるといった、経済的な裏づけが反映されている点は見逃せない。愛読していそうな、もしくは影響を受けていそうな雑誌によるYSの分類が、すでにクラスの違いを内包してい

る上に、その各YS内にも「若者文化の階層分化」ともいべき事態が進展していたのである（小沢、1985→1989）。映画「なんとなく、クリスタル」の脚本家が、「現象的に表れてくるクリスタル族・あれはクリスタル族ではないと思う。クリスタル族というのは、族には絶対ならない人種だから」（1981年6月号『シナリオ』）と語るように、従来の「族」のもつ凝集性や統一性（uniformity）はそこにはなく、あるのはあくまでも「派」としてのまとまりであり、その中での無限の差別化——自分「JJガールないしクリスタル族ではない」という意識を持つYS成員の増大——が生じていたのである³²⁾。

こうした差別化は、ファッションだけには止まらず、大学など学校（名）のブランド化とも連動していた³³⁾。田中康夫らは、慶応大学を頂点とした「アソビの開拓」大学——ただし、セックスの回数は父親の経済力に正比例する——をリーダーに、早稲田大学以下の「ファッション追従」大学——中でも中央・法政・明治を「病的“クリスタル族”養成大学」と揶揄——を対置し、単に偏差値には還元できない、大学の階層化を半ば冗談、半ば本気に行っている（田中・泉、1984）。

一方、ジェンダーという視点からクリスタル族を見れば、『なんとなく、クリスタル』自体女性が主人公であり、少なからぬ数の男性がJJに目を通し³⁴⁾、「クリスタル野郎の時代」（1981年8月号『アクロス』）といった記事では男性のよりいっそうの高級ブランド志向が指摘されるなど、「女性＝リーダー／男性＝フォロワー」という構

31) JJなどのファッション雑誌は、主に大学生（ないし大学卒）を想定してつくられていた。『ポパイ』編集長木滑良久は「『ポパイ』も、はじめは読者の教養程度を大学一年生くらいに想定して始めたんです。ガリ勉してやっと大学に入った、「さあ、入ったからのびのび遊ぼう」という、私立大学の同好会活動なんかを活発にやっている学生に目を配りながら本をつくろうと考え出したものなんです」（岩崎ほか、1981：32）と語っている。

32) 84年の流行語となったマル金・マルビという「金持／貧乏」の差別化ゲームも、一見センスの違いのようだが、実は出自や経済的なバックグラウンドの差を示していた（渡辺・タラコプロダクション、1984）。

33) 1976年7月3日号『週刊読売』「特別企画JAR」では、上智（J）・青山学院（A）・立教（R）など、都心に本拠を持つお洒落で明るく、豊かなミッション系大学や、そこで同好会の人気が取上げられていた（その後、この三大学は、「JALバック」と括られたりもする）。『なんとなく、クリスタル』にも、共立女子大「フェイリス、学力、出身階層ともに、ごく平均的な女子大生が多く」（田中、1981→1985：29）、テニス同好会「共学の大学に入れなかった「一流」女子大の生徒さんは、「銘柄」大学の学生さんと一緒に、仲よしテニス同好会で、形ばかりのテニス練習をします」（田中、1981→1985：15）といった大学のブランド化・差別化を示す注釈が数多く見られた。

34) 81年の愛読者調査において、回答590名中、JJを挙げたものは女性62名、男性8名であった（総合研究開発機構、1983a）。

図も成立していた³⁵⁾。しかし、小説の最終的な結末が、同居している彼——小説中では、「同棲」という言葉の持つ「団塊」の影ゆえ、あえて「共棲」と表現されている——との関係の中に、最終的な安住の地を見出し、道ですれ違った美しい専業主婦らしき女性に自身のあるべき将来像を重ねるといったように、クリスタル族の女性たちは、コンサヴァティヴなジェンダー観に異を唱える存在ではなかった。

世代としての「新人類」

先に引いた田中康夫の談話の中に、石原慎太郎や村上龍への反発がみられるように、クリスタル族は先行する世代への違和を大きな要因としている(泉, 1985)。60年前後に生まれた世代が、「新人類」——それ以前には「ニューヤング」(日本経済新聞社, 1977)——と呼ばれていく過程はすでに検討したが(難波, 2004)、この世代は「中学生になると、頻繁に「セブティーン」や、「女友」の「プチプチ」、「MC・SISTER」などのファッション雑誌をながめるように」なり、ニュートラ・ハマトラを間接・直接に体験し、「あの「なんとなく、クリスタル」にも登場した「JJ」も、街頭スナップや読者のファッション傾向のリサーチなどを行ってきた雑誌だ。やはり生活が豊かになり、ファッションは夢から現実へと舞い降りてきた」という過程の真っ直中で育ってきたのである(河出書房新社編集部, 1982: 167-8)。

戦後世代を太陽族世代(ロカビリー族・ソーラー族・カミナリ族・ビート族・ながら族・六本木族・窓ぎわ族・トリノコ族・おじさん族・しぐれ族)、団塊の世代(アイビー族・ヒッピー族・深夜放送族・エレキ族・原宿族・みゆき族・ハレンチ族・フーテン族・アンノン紳士・行けない族)、モラトリアム世代(ヤング・アンノン族・モラトリアム人間・ツッパリ・六無主義・プレッピー)、新人類世代(クリスタル族・夕暮れ族・

JJガール・ネクラ族・スキゾキッズ・ピーターパン人間)の四つに整理した根本孝によれば、新人類世代は青年期特有のアイデンティティの危機に対しては「脱アイデンティティ」の戦略をとり、革新志向に関しては「体制からの逃走」を、仲間志向に関しては「個我集合」を特徴とするという(根本, 1987)。前世代までの若者たちのような明確な体制の拒否や抵抗、そのための同世代との連帯や均質化を避けつつ、クリスタル族をはじめ新人類たちは、さまざまなモノを「限りなく支配的な体制文化への寄りそいの徴候でありながら、若者たちにとって、それは超脱の方へ微妙な差異をもって翻身していく際の小道具」(栗原, 1986: 288)として利用しながら、曖昧な嗜好や気分をそれこそ「なんとなく」分有できる相手との共存をはかっていった。

だが、こうした気分の共有にもとづくYSである以上、年齢や世代というファクターよりも、趣味や嗜好の共通性——クリスタル族の場合は、単なる趣味・嗜好というよりも階層に裏打ちされた文化資本としてのそれ——の方が重要なものとなっていく。まさしく、「文化の時代」にあっては、「若者」も「年輩」も、程度の差を問わなければ、例外なく記号的環境にのりあげていたのである(高橋, 1989: 217)。81年の調査に見られた次のような意識は、「Don't trust over thirty」を唱え、ことさら「ヤング」であることに強い思いを抱いた上の世代とは、明らかに異なるものであった。

「彼らは他世代——もちろん若者の場合、意味ある他者として自分たちより上の世代がずっと重要であるが——に対し、意識的に断絶感を持つとせず、さらに共通情報を共有し合える関係になりうれば、年齢を超えて同世代意識を感じ合うことができるのである。／先に紹介したように、今回実施したアンケート調査の結果でも、若者の仲間意識は特に年上に対して寛容で、多くは一〇歳く

35) 「流行語になったわりに、もう一つよくわからない「クリスタル族」の実態。某デザイン研究所が赤坂、青山、六本木でブランド商品を身につけた三百二十一人(男百四十四人、女百七十七人)に直撃インタビュー。「ブランド商品代好き」と答えたのは女性の一一・九%、男性はなんと二倍以上の二四・三%。「なんとなくクリスタル」な生き方に共鳴できる女性は三・四%しかないのに男は一六・七%が大賛成と、女より男のほうがよっぽど軽佻浮薄という結果が出た」(1981年9月3日号『週刊文春』「クリスタル族は女より男のほうが軽薄」)。

らい年上まで、さらに少なからぬ部分はそれ以上までも同世代として認めようという傾向が現れていた。また三人に一人は「年上だからといってズレを感じることはない」と答えている。これらのものにとっては、生活行動自体やそれを規定する情報の共通性にこそ、同世代意識を決定する要因であり、年齢と世代が必ずしも結びつかないものにあっているとも考えられる」(総合研究開発機構, 1983a: 126)。

カタログ化する都市空間へ

ファッション評論家の川本恵子によれば、ニュートラは「別名カタログ・ファッション。カタログ雑誌を見て、これとあれなんて具合に選り出せば、鏡の前でいちいちコーディネートを考えてなくても、まあまあサマになるという実に便利で万人向けのスタイル」(川本, 1986: 46)であるという³⁶⁾。こうしたカタログ雑誌を飾ったのは、初期『an-an』のような外人モデルよりも、読者に近い(もしくは読者である)モデルたちであった。川本は82年当時の状況を次のように語っている。

「若者向けのファッション雑誌には、よく“街頭スナップ”というページがある。街を歩く素人の男の子や女の子のファッションが主役だから、当然雑誌に載せても観賞にたえる被写体(洋服を含めて)が要求される。登場回数として一番多いのは、やはり渋谷の公園通りだろう。ほかにも原宿の明治通りの交差点なんていうのがあるけれど、あそこはファッションが仕事になっているプロ

か、でなければ地方からの遠征組がほとんどで、ほどよい素人っぽさではかなわない。／ほんの少し前まで、こういう場所としては、新宿の紀伊国屋書店前が選ばれていた。でも、“若者の街”というキャッチフレーズが新宿から渋谷に移ってから、こういったファッションスナップの代表的場所は渋谷公園通りだ。／プロというほど飛びぬけてはいないけど、オシャレには人並み以上の関心があって、ハヤリ物にも目がない。悪くいえばミーハー。こういう子が集まってくるのが渋谷の公園通り」(川本, 1986: 80)

70年代、若者文化の中心もしくは象徴としての街が、新宿から渋谷へと移行したことは多くの論者が指摘するところであり、『なんとなく、クリスタル』の舞台も渋谷区から港区にかけての地域に限定されていた³⁷⁾。

たとえば82年の渋谷における街頭調査では、「ブティックは、アルファ・キュービック、バッグはルイ・ヴィトンにタバコはラーク。車はBMW、ディスコは六本木周辺、アルコールはパドワイザー。買い物はパルコと西武百貨店、とはっきりとクリスタル願望がでてきている。あくまでも雰囲気、ムードを重視し、リッチ感覚を必要とする」「カワイブリッコで山の手・お嬢様志向が強い彼女達」が多数派を占め、渋谷・東急東横線・『JJ』・テニスなどに対して良好なイメージが共有されている様子が見えがえる(パルコ調査企画, 1983: 26-7)。

だがこの時期、すべての若者が、クリスタル族

36) 「アメリカでのカタログ文化は『ホール・アース・カタログ』で代表されるようにエコロジーの運動のなかから生まれたメッセージ色の強い文化だったのに、それが日本に輸入されるや、脱メッセージ・脱イデオロギーの文化に軟化してしまった。…現在の都市中産階級子弟は、不確かな思想や抽象概念と知的格闘をするよりも、身近なモノとの確かな関係のほうを求める。すでに大学生が大衆化している現代では、彼らは知的エリートの自覚も放棄しているから、なんのためらいもなくモノのあふれかえった世界のほうへ乗り出していく。…アメリカでは『ホール・アース・カタログ』という形で人間とモノとの直接的関係を回復するものとして登場したカタログ文化が、日本では皮肉に作用し、人間をますます記号の海に自閉化させる方向にむかっている」(川本, 1981: 78-9)。

37) 60年代の原宿族、70年代の暴走族、80年前後の竹の子族を経て、当時表参道や青山通りは、もっともファッションナブルな地域となっていた。そして、その一帯でさまざまなスタイルの若者たちの棲み分けが進んでいく。「まず第一にタコツボの行動範囲をみてみよう。渋谷から青山、赤坂そして六本木と青山通り(ルート246)を軸として細長く帯状に広がっているのがトラッド系である。ブルックスブラザーズ、ケントなどトラッドファッションの総本山のショップが点在している青山通りから、渋谷にかけてこのタコツボを支える大学、女子大、高校がひかえていることが注目される。城南地区の良家子女に多くみられるファッションだけに渋谷を軸とした彼女等の行動がこのタコツボの範囲を決定しているのだ」(1981年2月号『アクロス』「現代若者風俗大研究《タコツボ》カタログ」)。

(ファッション) やJJガールを志向していたわけではない。1982年5月28日号『週刊朝日』「最新キャンパス風俗 お仲間ファッションでしか連帯できないコマドリ学生たち」では、トラッド・サーファー・フィフティーズ・ニューウェーブの「四大セクト」が、それぞれ青山通り沿い、渋谷もしくは六本木(のディスコ)、代々木公園付近、キラエ通り沿いを「縄張り」として棲み分けているさまが指摘されている³⁸⁾。また、マーケティング情報誌『アクロス』は、1981年2月号の特集「現代若者風俗大研究《タコツボ》カタログ」において、トラッド派(アイビー、プレッピー、ハマトラ、JJ)、NW派(フレンチトラッド、パンク、ニューモッズ、テクノコ)、代々木公園派(竹の子、ウエストコースト、50's)といった分類を試み、その後も80年代を通じて若者文化の分化(タコツボ化)とそれぞれのテリトリーの変化を追っている³⁹⁾。そして、こうした多様な「タコツボ」成員のバックグラウンドを見ていくと、大学生と非大学生とに大別される。大学生中心のYSとしては、アイビー(男、19~30才、(体育会系)大学生・OB・慶応・青山学院)、プレッピー(男女、19~23才、(文系)大学生)、ハマトラ(女、17~23才、家事手伝い・女子学生(高校・短大)・フェリス短大)、JJ(女、19~30才、大学生・OL・家事手伝い)、ウエストコース

ト(男女、17~25才、一般大学生・立教・成蹊)などが、非大学生中心のYSとしては、ニューウェーブ(男女、20~30才、ブティック店員・美容師・日大芸術・文化服装学院)、竹の子(男女、13~17才、中・高校生・暴走族)、50's(男女、16~19才、高校生・勤労青少年)などが挙げられている。また前者が、実際に居住するにせよ、単に憧れるにせよ城南地区を志向しているのに対し、後者は原宿から新宿にかけてを志向することが指摘されている。

要するに70年代までであれば、ファッションにさほど興味を持たない(もしくは持てない)「サイレント・マジョリティ」とも言うべき集団があり、その中から奇矯なファッションによって突出した「〇〇族」が現れ、時代の注目を一身に浴び、数年で廃れていくという構図が一般的であったものが、80年代以降は、大多数の若者がファッションに関心を持ち、誰もが何らかの「セクト」や「派」に所属し、その「タコツボ」の多くは、カタログ雑誌を核に形成されるようになったのである(難波, 2000a・2000b)。また、各タコツボ向けに出版された雑誌は、ファッションのみならず街遊びのためのマニュアルとしても機能していった(成瀬, 1993・1996・2000)⁴⁰⁾。

そうした中、クリスタル族のブームは、83年以降下火となっていくが⁴¹⁾、それが「個性化のゆき

38) たとえば、79年に「渋谷駅前にオープンした東急のショッピングビル「109」そのものは、ニュートラやサーファー族を対象にしたテナントが多いせいか、こういった客層でにぎわっている。だけどまずニューウェーブ派といわれる東京のデザイナーズ・ブランドやヨーロッパのカジュアルを好んで着る子たちは「109」には行かない(川本, 1986: 81)。「109」が、ギャルのメッカとなるのは90年代のことである。

39) 「若者の間に浮上してきたタコツボの一つが「JJ」であり、「ウエストコースト」であり「ハマトラ」なのだ。大学生の彼女、彼たちを総称してクリスタル族と呼ぶが、その中でもJJは六本木のやや高級目のディスコ「サンバクラブ」や「The Beep club」に、サーファー、ハマトラは六本木の「キサナドゥ」へと、住み分けがハッキリしていた場合もある。また中でもクリスタル族を自認しているような、いわゆるアーバンリーグ(慶応、立教、成城、青山などの大学)の学生達はスクエアビルにある「フーファー」や、「ギゼ」、「ネベンタ」などへ行った(1989年10月号『アクロス』「ディスコノリ感染20年史」)。

40) 「こうしたアイデンティティ装置としての渋谷を歩くとき、人々に求められるのは、ひたすら従順に〈舞台装置〉や〈台本〉に従うこと、つまり、記号を上首尾に組み合わせ、他の遊歩者たちの認証を得るという作業である。「記号には還元されない私があるのではないか」などといった問いは、場を〈シラケ〉させるものとして排除されなくてはならない。／●六本木へ遊びに行く時には、クレージュのスカートかパンタロンに、ラネロッシのスポーツ・シャツといった組み合わせ ●散歩をするなら、有栖川公園から元麻布の西町インターナショナル・スクールを通過して……麻布十番に出るとか、白金の自然教育園を歩くのもいい ●向島を歩く時にブランド物を着ていくなんて、愚かしいことはない／都市を徹底的に〈舞台装置〉として捉えるこの物語(『なんとなくクリスタル』)の主人公は、「主体性がないわけではない。別にどちらでもよいのでもない。選ぶ方は最初から決まっていた。ただ、肩ひじ張って選ぶことをしたくないだけだった」となんの衒いもなく言う(北田, 2002: 100-1)。

41) 「JJファッションの象徴だったレイヤード率は82年8月は渋谷が15.6%でトップだったが、83年8月には渋谷は

すぎが、めだたない服装、人と同じような服装を良しとする風潮をもたらし、制服的なファッションであるトラッド志向を甦らせたことは、ルールはずしの結果の教科書希求現象と共に、今後、タコソボ状況をより強める要因となっていくと思われる。マジョリティー志向とエリート意識とが背中あわせにくっついたこのタコソボが実は最も'80年代的であるといえるのではないだろうか(1981年2月号『アクロス』)と総括されるように、メジャー感とステイタス感を体現できるスタイルとして、その時々々の流行を取り入れつつ、クリスタル族の後裔は現在まで生きのび、幾度かのリヴァイヴァルを迎えている。その点では、社会空間をまったく異にするはずの「暴走族-ヤンキー」の流れも同様の軌跡を辿っている。暴走族-ヤンキー以上に、自覚的に「消費者」であったクリスタル族は、佐藤郁哉が「消費によって個性を演出していこうとする試みは、消費と商品生産の様式へのきわめて没个性的な同調である。これと同様に商品(モノ)と消費のあり方によってひきおこされた暴走族という逸脱の様式は、最終的には消費と商品生産という、より大きな様式の中にとりこまれることによって、潜在力を吸収されてしまう。…最終的には彼らを、より従順な消費者として、そしてまた次代の若者たちがそれに対して反抗する「日常性」を作り出す「大人」として社会の中にとりこんでいく」(佐藤, 1984:

277)と指摘するプロセスによりいっそう適格的であり、その salience を失いつつも、一つの「派」として社会の中で定位置を獲得していったのである⁴²⁾。

だがそうした共通点とともに、両YSの間には、クリスタル族そのものは消失したにも関わらず、暴走族(と呼ばれる存在)は世紀を超えて存在している点などの相違も存在する。YSを記号の問題としてのみならず、身体性の問題として研究することを主張したポール・スイートマンに倣えば、それこそ「身体拡張のメディア」である二輪・四輪をそのYSの核に組み込んでいる暴走族は、その身体感覚・技法が継承され続けるがゆえに、ある同一性や求心力を保ち得たのだとも考えられる⁴³⁾。このことは、同様に70年代から80年代にかけて形成され、今日依然以前健在である、各種メディアをめぐる身体技法を中核とする「おたく(族)」との対比の上でも興味深い。

【3】小括

以上、大学生/非大学生という、一種の擬似的なクラスの差異を背景とした二つのYSを概観した。

「ツッパリ」や「ヤンキー」のスタイルの登場は、その当時顕著になった若者文化内での分化を

10.8%と減少し、新宿が12.3%でトップとなった。JJの牙城だった渋谷では、83年秋頃を境にNWへの転換を図る女性が出てきていたようだ。/JJファッションを支えていた女子大生は83年4月放映開始の『オールナイトフジ』(フジTV)によって、そのパープリンパワーを大々的にアピールしたため、知性と個性を求め自らのアイデンティティ探しを始めた脱JJ女子大生がNW寄りに傾いた訳だ(アクロス編集室, 1989:262)。またJJガールのステイタス・シンボルであったムートンのコートは、「JJ全盛時代、冬になるとレイヤードヘアでレブロンオパール入りの青いアイシャドー、ピンクの口紅の女性が、こぞってムートンを身につけた。しかし、JJ衰退と共に、ムートン人気も消滅。80年代中頃にはタンスのこやしナンバー1となったが、渋谷など一部の町では、ボディコンブームと共にムートンが浮上した」(アクロス編集室, 1989:325)。

42) ラフォーレ原宿などを震源とするDCブームを前に、先の『なんとなく、クリスタル』の引用にあった「パークレー」の原宿店は閉店を余儀なくされる(1991年1月24日号『GORO』「ファッション戦国時代から近代の夜明け」)。だが、JJモデルと読者たちは、『Classy』『Very』『Story』と独自のテイストをもつ雑誌群——光文社系の「勝ち犬系女性誌」(酒井, 2003)——を育みつづけ(黒田, 2002)、娘世代の『JJbis』も生み出している。一方、『an-an』のマガジンハウスは、この世代——59~64年生まれを「ハナコ世代」と括る場合もある(川島・小原, 2002)——に向けて『Hanako』を、より下の世代に向けて『Olive』を創刊し、ハナコ族やオリブ少女を生み出し続けた(香山, 1991; 山下, 1992)。

43) 「サブカルチャーな実践が、それにかかわる行為者達の身体を通じて、もしくは身体において分節される方法は、これまで見過ごされ、もしくは十分に注意を払われない傾向にあった。…バーミンガム大学現代文化研究所による英国サブカルチャーへの古典的研究は、サブカルチャーなフォーメーションズを記号体系として主に扱い、テクスチャルないしは記号論的アプローチを採用することが多く、サブカルチャーリストたち自身の生きられた経験を見下ろし無視しがちであった」(Sweetman, 2001:184)。

反映している。その背景には、60年代末から70年代初めにかけて起きた大学進学率の急激な上昇という現象があった。彼らのスタイルは、多くのサブカルチャーのスタイル同様、他の集団との差別化をはかるものと理解できる。彼らにとっての他者は、大人だけではなく、彼らとは異なる文化を持つ若者、つまり大学に進学する若者でもあった。「ヘビー・デューティー」や「ニュートラ」といった当時の大学生スタイルは、健全な若さの中に洗練を求め、雑誌によってもたらされた情報によって最新の海外の流行や高価なブランドを消費するものであった」(大山, 2003: 131)

また、この二つのYSは、その核心となるローカリティへの意味づけが、地元か、買い物や遊びに出かける街か、という違いをみせていた。やがて、地元を舞台にした逸脱文化は、時代遅れなものとなっていく⁴⁴⁾。

「ヤンキー・暴走族と、チーマー・コギャルは対照的である。前者は崩壊しつつある地域を体現し、後者は浮上しつつある都市的現実を体現する。それを示すのが最近(九五年)の『ティーンズロード』誌上での「茶髪狩り論争」だ。首都圏郊外の駅改札ではレディース(女暴走族)が待ち伏せ、茶髪のコギャルが通ると「明日までに黒く染め直せ」とインネンをつけて、染め直さないとフクロダタキにする「茶髪狩り」が頻発している。「そんな町内会のオヤジみたいなことをやっていいのか」「いや、当然だ」という対立が論争の内実なのである。／ヤンキーは実は地域社会の最後の守り神だ。大人たちが町内会やPTAを

作って地域的な共同性を培うとすると、ヤンキーたちは「俺たちはそうじゃねえ」とばかりにもう一つのウラ共同体を作る。だから暴走族も女は十八歳、男は二十歳で卒業して、卒業後はダンプの運ちゃんやパートのねえちゃんになって、ほどなくヤンママ・ヤンパパになり、いずれは町内会のオジサン・オバサンになる。ヤンキーは町内会予備群なのだ。ところが、チーマー・コギャル系は、地域共同体から「第四空間」としての街に流れ出した子たちで、地域性の衰弱をこそ体現する」(宮台, 1997a: 145)

一方、街を次世代やティーン・エイジャーに奪われていったかっこうの元クリスタル族たちは、二子玉川の「コマダム」や白金台の「シロガネーゼ」など、居住地のステイタスを競い合うようになる(酒井, 1996)。本格的な消費社会への離陸の中で、アイデンティティの投錨の仕方が、消費やレジャーを通じてのみ——経済力を反映した学(校)歴や居住地も購入されるべきブランド——となり、多くのリヴァイヴを含んだ「スタイルのスーパーマーケット」の中からの選択の問題へと化していく事態は、なにも日本だけに限られた現象ではない(Polhemus, 1994)⁴⁵⁾。

本稿では、消費文化化を強める若者文化の事例として二つのYSを追ってきた。それはまた、80年代をむかえすべての若者が何らかのYSにコミットし、さらにそこから完全に脱皮しないまま年齢を重ねることが常態となった社会の出現を意味している(小谷, 2004)。

44) 「本年4月愛知県警察本部は、暴走族対策室を発展解消させ、非行集団対策室を立ち上げた。チーマー・カラーギャングにどう立ち向かうか、課題はまだ多い」(名古屋保護観察所暴走族事件対策班, 2002: 67)。また2003年12月13日付「読売新聞夕刊(関西版)」の記事「ヴィッセル神戸譲渡」中には「鹿島が地域に根ざすチーム作りに成功し、暴走族が激減したという」とある。ローカリティに依拠する非行文化のあり方は、すでにヤンキーだけでは止まらない。

45) 川本恵子は、ニュートラを「ファッション植民地日本で、初めて生まれたオリジナルなスタイルとっていいだろう」と評価するが、82年1月に書かれた「3A族とクリスタル族」というエッセイでは、「麻布に住んで、青山でショッピングして、赤坂でプレーというのが在日外国人にとってステイタスであるとか。これ場所の頭文字をとって“3A”というのだそうです。日本のクリスタル族と変わらないというのがおかしい」(川本, 1986: 54)と、クリスタル族における外国人のまなざしの内在化を指摘する。だが、出発点ではアメリカン・カルチャーの影響を受けていたヤンキー・スタイルが、その後「アメリカの影」を微塵も感じさせなくなったのと同様に、ニュートラやハマトラからも、太陽族の段階にはあったようなアメリカの呪縛は感じられない(吉見, 2004)。

参考・引用文献

- アクロス編集室編 1986『いま揺れ動く、東京：新東京論』PARCO出版
1987『「東京」の侵略：首都改造計画は何を生むのか』PARCO出版
1989『東京の若者』PARCO出版
- 赤塚行雄編 1982『青少年非行・犯罪史資料①』刊々堂出版社
- 嵐山光三郎 1985→2003『口笛の歌が聞こえる』新風舎文庫
- 千葉康則 1975a「暴走族の実態とその背景」『ジュリスト』594
1975b『暴走族：進学競争の裏側で』日経新書
1976「暴走族の世界」『通産ジャーナル』9-5
- Cohen, Stanley 1972 "Fork Devils and Moral Panics: The creation of the Mods and Rockers" Basil Blackwell
- 第三書館編集部編 1991『暴走族100人の疾走・増補』第三書館
- 堂城剛 1982『ドキュメント・暴走族』神戸新聞出版センター
- Field, Norma 1987『「なんとなくクリスタル」とポストモダニズムの徴候』『現代思想』15-15
- フジテレビ 1991『カノッサの屈辱』フジテレビ出版
- 福田文昭 1980『'69新宿カミナリ族はいま……：青春ふたたび帰らず』第三書館
- 後藤紀朗 1975「暴走族に関する意識調査の結果」『月刊交通』6-8
- 博報堂生活総合研究所 1985『若者：感性時代の先導者たち』博報堂生活総合研究所
- Hall, S. & Jefferson, T. (eds.) 1976 "Resistance through Rituals: Youth subcultures in post-war Britain" Hutchinson
- 平林猛・朝倉喬司編 1977『生きてる証しがほしいんだ：「暴走族」青春のモノローグ』大和出版
- 井口浩文 2002「「物」との対峙：石原慎太郎『太陽の季節』と田中康夫『なんとなく、クリスタル』」『日本文学誌要』65
- 今井俊博 1975『生活ファッション考』青友書房
- 伊東聖子 1982『新宿物語』三一書房
- 岩崎勝海ほか 1981『読者を探せ：最近「本読み」事情』学陽書房
- 泉麻人 1985『無関係世代』朝日出版社
- 門脇厚司 1992『子供と若者のく異界』東洋館出版社
- 兼頭吉市 1974「暴走族——社会的歪みの体現」『月刊生徒指導』4-14
1975a「暴走の病理」『月刊生活指導』5-8
1975b「暴走族の実態と対策」『運転管理』11-8
- 加藤明・石井一弘 1986『原宿物語』草思社
- 河出書房新社編集部編 1982『わが世代 昭和三十五年生まれ』河出書房新社
- 川木淳 1981『ツツパリふあっしょん大図鑑』オーエス出版
- 川本恵子 1986『ファッション主義』筑摩書房
- 川本三郎 1981「カタログ文化は定着したか」『中央公論』96-4 (1133)
- 川島蓉子・小原直花 2002『おしゃれ消費ターゲット：売れるマーケットは7つの世代がきめる』幻冬舎
- 香山リカ 1991「オリーブ少女の欲望のありか」大塚英志編『少女雑誌論』東京書籍
- 菊池和典 1981「暴走族についての一考察」『家庭裁判月報』33-7
- 北田暁大 2002『広告都市・東京』廣済堂
- 神戸市青少年文化研究所編 1980『KOBE 青少年研究シリーズ No. 2：くるまと青少年』神戸市青少年問題協議会
- 神戸市青少年問題協議会 1977『（暴走族等調査検討専門委員会報告書）暴走族・今日の青少年問題』神戸市青少年問題協議会
- 国際交通安全学会004プロジェクトチーム 1997「暴走族と高校生に見る車接近の背景要因の研究（中間報告）」『国際交通安全学会誌』3-1
- 香咲弥須子 1981『原宿・竹の子族』第三書館
- 小谷敏 2004「若者文化のゆくえ」西原和久・宇都宮京子編『クリティックとしての社会学』東信堂
- 栗原彬 1981『「なんとなく、クリスタル」：モノ・ヒト・クニの共謀』『現代思想』9-7
1986「若者の「経験」」内山秀夫・栗原彬編『昭和同時代を生きる』有斐閣
- 黒田知永子 2002『チコ・バイブル』KKベストセラーズ
- 前田愛 1982『都市空間のなかの文学』筑摩書房
- 松浦幸桐子 1992「一途！：単車とケンカに捧げた青春」『別冊宝島158：あぶない少女たち』JICC出版
- 三田村落子 2004『ブランドビジネス』平凡社新書
- 宮台真司 1997a『まぼろしの郊外：成熟社会を生きる若者たちの行方』朝日新聞社
1997b『世紀末の作法』メディアファクトリー
- 三宅守一ほか 1971「自動車を媒介として発生する非行の分析」『科学警察研究所報告防犯少年編』12-1
- 森武夫 1975「暴走族問題」『家庭裁判月報』27-12
- 森田洋司 1982「暴走族青少年の逸脱形成要因としての学業不振」『人文研究』34-3
1985「「暴走族」青少年の性格特性と学業不振：内向性志向文化と少年非行」『社会学評論』36-1 (141)
- 諸橋泰樹 2002『ジェンダーの語られ方、メディアのつくり方』現代書館
- 麦島文夫・田村雅幸 1976「暴走族の実態分析（上）」『警察学論集』29-3

- 麦島文夫・竹江孝 1980「暴走族の実態と背景」『法律のひろば』33-3
 永江朗 1999「1970～80年代：暴走戦国時代クロニクル」『ワニの穴②アウトロー伝説：昭和～平成暴力裏面史』ワニマガジン社
 中野翠 1999『お洋服クロニクル』中央公論新社
 長山泰久 1989「暴走族と高校生・中学生」屋久孝夫編『暴走族』同朋舎
 名古屋保護観察所暴走族事件対策班 2002「暴走族類型対象者に対する処遇の現状」『犯罪と非行』133
 中部博編 1979『暴走族100人の疾走』第三書館
 難波功士 2000a「ファッション雑誌にみる“カリスマ”」『関西学院大学社会学部紀要』87
 2000b「ストリート・ファッションとファッション・ストリートの構築」『関西学院大学社会学部紀要』88
 2004「『若者論』論」『関西学院大学社会学部紀要』97
 成瀬厚 1993「商品としての街、代官山」『人文地理』45-6
 1996「『Hanako』の地理的記述に表象される「東京女性」のアイデンティティ」『地理科学』51-4
 2000「東京生活のススメ：女性週刊誌『Hanako』が提供する賃貸住宅情報の批判的解説」『季刊地理学』52
 根本孝 1987『新人類vs管理者』中央経済社
 NHKアーカイブス番組プロジェクト編 2003『夢と若者たちの群像』双葉社
 日本経済新聞社編 1977『ニューヤング』日本経済新聞社
 野間易通 2004「ロックが鳴る場、不良がいる場」『ミュージック・マガジン』36-8 (491)
 奥村隆 1989「労働者の生活世界の再生産過程における「階級」カテゴリー」『ソシオロギス』13
 大山昌彦 2003「不良、ツッパリ、ヤンキーはどう違う？」『音楽誌が書かないJポップ批評29：氣志團と『俺たちのヤンキー・ロック』』宝島社
 小沢雅子 1985→1989『新・階層消費の時代』朝日文庫
 バルコ調査企画 1983『現代女性ニュートレンドレポート』PARCO出版
 Polhemus, Ted 1994 "Street Style" Thames and Hudson
 Rattansi, A. & Phoenix, A. 1997 'Rethinking Youth Identities', Bynner, John et al. (eds.) "Youth, Citizenship and Social Change in a European Context" Ashgate
 Sacks, Harvey 1972 'On the Analyzability of Stories by Children', Gumpertz, J. & Hymes, D. (eds.) "Directions in Sociolinguistics" Basil Blackwell
 1979 'Hotroddr: A revolutionary category', =1987 山田富秋ほか編訳『エスノメソドロギー：社会学的思考の解体』せりか書房
 酒井冬雪 1996『コマダムのススメ』イーハトーヴ
 酒井順子 2003『負け犬の遠吠え』講談社
 桜井哲夫 1982「青年文化の変容をめぐって：東経大生の文化環境調査から」『東京経学会誌』127
 斎藤直樹 1994「『暴走族』の誕生と解体」芹沢俊介編『解体される子どもたち』青弓社
 佐藤郁哉 1984『暴走族のエスノグラフィー：モードの叛乱と文化の呪縛』新曜社
 1985『ヤンキー・暴走族・社会人：逸脱的ライフスタイルの自然史』新曜社
 佐藤信哉 1982『心の中のバイクを見つけよう：暴走族だった僕の言い分』現代史出版会
 Schouten, J. & McAlexander, J. 1995 'Subculture of Consumption', "Journal of Consumer Research" 22
 総合研究開発機構 1983a『若者と都市』学陽書房
 1983b『地方都市青年層のライフスタイルと文化行動』総合研究開発機構
 Sweetman, Paul 2001 "Stop Making Sense?: The problem of the body in youth/sub/counter-culture", Cunningham-Burley, S. & Backett-Milburn, K. (eds.) "Exploring the Body" Palgrave
 集団BOX 1981『ルージュをひいた悪魔たち：女暴走族ドキュメント写真集』青年書館
 高田朗雄 1975「暴走族：その実態と対策」『ジュリスト』594
 高橋敏夫 1989「ファッションと文学」有精堂編集部編『講座昭和と文学史第五巻解体と変容』有精堂
 武聖子 2003「女性誌は女の人生の道しるべです：そのすみわけ戦略」『現代風俗2003』編集委員会編『テリトリー・マシン』現代風俗研究会
 竹村潤編 1980『爆走レディス：土曜の夜はバラダイス』大陸書房
 田村雅幸 1978「暴走族の実態と動向」『犯罪と非行』38
 1981「法改正後の暴走族の動向に関する研究」『科学警察研究所報告防犯少年編』22-1
 田村雅幸・麦島文夫 1975「暴走族の実態分析（I）」『科学警察研究所報告防犯少年編』16-2
 田中康夫 1981→1985『なんとなく、クリスタル』新潮社
 田中康夫・泉麻人 1984『新々大学案内 大学・解体新書』祥伝社
 Thornton, Sarah 1995 "Club Cultures: Music, media and subcultural capital" Polity
 柄内良 1999「レディス伝説」『ワニの穴②アウトロー伝説：昭和～平成暴力裏面史』ワニマガジン社
 戸井十月 1980『シャコタン・ブギ：暴走族女リー

- ダーの青春』角川書店
東洋経済新報社編 1985 『国勢調査集大成人口統計
総覧』東洋経済新報社
土田敏夫 1997「全開バリバリ暴走族本大集会」『活字
秘宝 Vol. 1：この本は怪しい!!!』洋泉社
上之二郎 1980『ドキュメント暴走族 part 1』二見書
房
1995『暴走族伝説：70～80年代を駆け抜けた青春
群像』KKベストセラーズ
渡辺和博・タラコプロダクション 1984『金魂巻』主
婦の友社
Wills, Paul 1977 “Learning to Labor”, =1996熊沢誠・山
田潤訳『ハマータウンの野郎ども』ちくま書房
1978 “Profane Culture” Routledge & Kegan Paul
山田美保子 1991「ポートハウス」『東京人』6-12
(51)
山口由美子 1992「大阪ヤンキーを探した：午前0時
のナンパポイント・ナビオ前」『別冊宝島158：あ
ぶない少女たち』JICC 出版
山下悦子 1992『さよなら Hanako 族』KKベストセ
ラーズ
ヤングオート編集部編 1994『ヤンキー今昔物語』芸
文社
吉見俊哉 2004「現代日本のアメリカ化における「基
地」と「消費」」庄司興吉編『情報社会変動のなか
のアメリカとアジア』彩流社

Concerning Youth Subcultures in the Postwar Era Vol. 3: 'Boso-zoku' and 'Crystal-zoku'

ABSTRACT

Since 1959, in the year 'Kaminari-zoku (Thunder Tribe)' was born, some Japanese motorcycle gangs began to be criticized and controlled by the police, educational institutions, and the press, which called them by names such as 'Mach-zoku', 'Harajuku-zoku' and 'Circuit-zoku'. Among them, the 'Boso-zoku (Joy-ride Tribe)', who appeared in the middle of the 1970s as the result of motorization and economic growth, provoked the most significant 'moral panic', and it was depicted as the most sensational 'folk devil' in Japanese society. Almost all of the members were males in their upper teens. They were high school students or manual workers. Their social class background was not so low, compared with other delinquent boys, though one of their features was their hostility toward the ethos of the middle class. They rejected higher learning or were rejected by it. Other features of the 'Boso-zoku' were masculinity, a sense of territory, kitsch-like nationalism, or aspiration to be featured by media, such as newspapers, car magazines and photo-books. By many means of regulation, in the 1980s, the number of 'Boso-zoku' groups and their size decreased. However, 'Yankees', 'Boso-zoku' sympathizers or alumni, have maintained or developed a unique life style. Even now, the word 'zoku' has become a synonym for 'Boso-zoku', and 'Yankee culture' survives.

While 'Yankee culture' has been constructed as Japanese working class youth culture, since the 1970s, against the background of rapid growth of the college-attendance ratio from the 1960s to the 1970s, college students from middle class families constructed their own youth subculture in the beginning of the 1980s, influenced by some 'catalogue magazines' featuring trendy fashions or shops. They were named the 'Crystal-zoku' after a novel, 'Nanto-naku, Crystal (Being Like a Crystal without Reason)' written by Yasuo Tanaka. In this novel, Tanaka depicted the urban lifestyle of a female student who belonged to tennis circle, had a part-time job as a fashion model, lived with a boyfriend in a fashionable area, dressed in expensive clothes and accessories with stylish brand names, and sometimes went to a disco to meet another boyfriend. Being the opposite to 'Boso-zoku', 'Crystal-zoku' was female-centered. They loved to go shopping and to spend much time in leisure around Minato-ku or Shibuya-ku, while 'Boso-zoku' or 'Yankees' committed themselves to the locality where they lived.

In the 1980s, every young person became interested in consumption, especially in fashion. So, many cliques focusing on different tastes for fashion emerged. There was the most significant division between college-goers (white-collar worker candidates) and non-college-goers (salesclerk or blue-collar candidates). In this paper, I examine 'Crystal-zoku' as an extreme example of the former and 'Yankees' of the latter. However, despite the difference of their backgrounds, these two youth subcultures symbolized the beginning of the period in which everybody's identity was based on how much money was spent on consumption, or how to consume.

Key Words: Boso-zoku, Crystal-zoku, youth subcultures